

敬ふべきお方はありませんでした。

神さまは、わが子のやうにアダムを可愛がつてくださいましたから、なんにも足りないものはありません、ほんたうに幸福でありました。しかし、アダムは、たつた獨りぼつちなのが淋しうございました。

神さまは、それをごらんになり「さうだ、人間が、たつた獨りぼつちでは好くない、あれと同じやうなのを、助け人として造つてやりませう。」と仰しやいました。そして、ある日のこと、アダムを深く眠らせ、その胸の一本の骨を抜きとつて、一人の女をお造りになりました。

やがてアダムが眼をさましますと、自分のそばに、これまで見たことのない自分と同じやうな人間がゐますので、ひじやうに驚きました。神さまは、

「なにも、そんなに驚くことはない、これはお前の助け人だ、お前のものだ、一しよに仲よくお暮しなさい。」

と仰せられました。

そこでアダムは、神さまにお禮を申し上げ、その女の手をとつて、

「お、よく来てくれました、私たつた獨りで淋しかつたよ。」

「あら、さうでしたか、でもこんな綺麗な賑かなところは、またとないと思ひますわ、美しい花が咲いて、小鳥が歌つて、けだものが踊つてゐるんですもの、あれ、木が枝をふつて私たちを呼んでます、小鳥が私たちに相手をはしさうにしてゐるんぢやありませんか、あれ、まあなんて面白い歌ちやございせんか。」

「うむ……、それはさうだ、私たちが二人でこゝにゐれば淋しくない、たつた獨りだと淋しいのだ。これからは、いつまでも淋しくない、私たちは幸ひなのだ。神さまは私たちを可愛がつて、この世界にあるものを治めさせて下さる、木も草も、鳥も獸も、私たちの支配の下にある……。」

「ほんたうに。私たちは一生けんめい、みんなを可愛がつてやりませう。」

二人は、毎日エデンの園に楽しい日を送りました。そしてお腹がすくと、手あたり次第お庭のなかにある果物や、草の實や密などを食べました。そこは春も夏も秋も冬も、おなじやうな暖かさで、裸であても丁度好い。そして何萬本とある樹のなかで、ただ一本の樹の實だけ、神様が食べていけないと仰せになりました。

「なせなれば、それは「善悪を知るの樹」で、たべるなら死んでしまふからでした。二人は、

「さうだ、何萬といふ澤山の樹のうち、たつた一本だ、この實をたべなくても、ほかに有あまるほど果物があるのだ、なんでもない……。」

「ところが或る日のこと、アダムが、

「どれ、もう晝も近づいた、何か新しい樹の實をとつてこようかな、お前一寸待つておいでね。」

と言ひのこして出かけますと、そのあとへ、悪魔の使者になつた蛇が、エバの側へと

あらはれました。

「おや、奥さま、どうしてこんなところに。」

「こんなところつて、此處は好いところぢやなくつて？」

「いゝえ、あちらへおいでなさいました。芝生の柔かな、とても好い處がございますよ。」

「さう、そんなところがあるの？」

蛇は上手に誘ひだして、善悪を知るの樹——智慧の樹——のそばへとやつて参りました。

「ほら、こゝですの、此芝生の柔いこと、まるで小羊の背みたいぢやございませんか。」

「ええ、さうねえ。」

「そして、ごらんないました、この樹の實の美しいこと。これはねえ、奥さん、このお庭ちうで一ばんおいしいんでございますのねえ。」

「さうや。」

「さう？ツて、奥さま、まだ召上りませんの、こんなに美味しいのを。」

「いくら美味しいたつて、私たちは食べちゃいけないのよ。」

「へえー、なぜでございます、こんなに美味しいものを。」

「神さまが、いけないつて仰しやつたの。」

「まあ、どうしてそんなことがあるのですか、一ばんおいしい物を食べちゃわるいなんて、神さまはそんな意地わるをあそばしますものか、大丈夫ですよ。」

「いっえ、いけないの、これを食べると死ぬんですつて。」

「いっえ、これや智慧の樹でございますよ、死ぬどころか、神さまのやうに賢くなるんです！」

「神さまのやうに？」

「ええ、だから一つ召上れな。ねえ、あの美しいのを。」

エバは、樹の實を眺めました、ゆたかに實つた果實が、太陽の光をうけて、いやが上にも美しく見えました。エバは思はず、

「まあ、ほんとに美味しさうねえ。」

と叫びました。蛇は待ちかまへて、

「さうですとも、そして神さまのやうに賢くなるんで……。」

エバは、とう／＼たまらなくなつて、白い腕をさしのべて、その實を一つちぎり取り、その唇におしあてました。——丁度晝時のひもじくなつたお腹に、それがどんなに美味しかつたか解りません。

その時、アダムの歸つてくる影が見えましたから、エバは急いで呼びとめて、

「まあ、これを召上がれな、とても美味しくつてよ。」

と言ひながら、又もや一つをちぎり取り、アダムにそれを食べさせました。

二人は、なんとなく胸さわぎがしてまゐりました、それから自分たちの裸であるの

が恥かしくなつてまゐりました。そして神さまに對して恐しくなりました。そこで手近にある無花果の葉をつないで腰に巻き、とある藪の中へと體をかくしました。

鳥の聲、動物の遊び興する音は、なほも響いて居りました、けれどもそれが二人にちつとも楽しくありませんでした。そのうちに、日が西に暮れかゝりました。

その時、神さまのお聲がして、

「お前たちは、どこにゐるのだ。」

いつもならば、子供がお父さまにすがるやうによるこぶのですが、二人は急におそろしくなつて縮みあがりました。

「はい……。」

「お前たちは、どこにゐる……？」

「はい、此處に居ります、みにくい裸ですから、恥しうございますので。」

「なに、お前たちは、これまで平氣で裸でゐたぢやないか、誰が裸なのを知らせたの

だ。私に隠しだてができると思ふか、お前はとうして、私がいけないと言つた樹の實をたべたのだ。」

「はい、蛇がすゝめましたので。」

「蛇がすゝめても食べなければいゝのだ。もう斯うなつては仕方がない。お前たちはここを出てしまはなければならぬ、これから野原で暮して、自分で食べる物を作らなければならぬのだ。」

二人は、さめくと泣きました。けれども神さまは愛の深いお方であると共に、正しいお方ですから、どこまでもお定めになつた規則をお守りなさいます。そこで二人は、立ちあがり、往みなれたエデンを出かけることになりました。神さまは、

「これ、お前たち、腰にまきつけた葉は、おきしほれて枯れるだらうから、この毛皮を巻くがいい、二匹の小羊が、お前たちの恥をかくすために殺されて此の毛皮を残したのだ。」

と仰せられました。

二人は、その毛皮をいただいて、なつかしいエデンを後に出かけました。

神さまが、折角可愛がつて下さつたのに、用もないのに、悪いことをして、ほんたうに申譯もない事ではありませんか。かうして人間の先祖が罪を犯しました、そして、あとからく生れて来る人間が罪を犯して、悲しい苦しい日を送るやうになりました。

神さまは、その様子をごらんあそばして、どんなに御心をお痛めなされたことか解りません。

二十一課 失はれし羊

〔罪より救ひ給ふ神・二〕

▼本課の目的

牧羊者が迷ひ出でし羊を懇切に探し求めて救ひたる比譬により、背ける我等を愛し給ふ神の恵を教ふ。

▼資料

(A) 直接資料……路加傳十五章三一六および馬太傳十八章二十一―二十四。

(B) 参考資料……新約物語。

▼金言

エホバは我が牧者なり。(詩篇二十三篇一)

▼教話の準備

芳夫のお家に可愛いボチがありました、小さな／＼赤ちやんのボチでした。芳夫は大層可愛がつて、大事に育てましたので、すん／＼大きくなりました。

ボチは、形も毛色もきれいで、そして伶俐で、みんなの言ふことをよく聞き分けました。またよくお家の番をしてくれました。ですから晝は晝でみんなのために喜ばれ、夜は夜でお家の助けになりました。

ところが或る日の朝のこと、いつもならば、雨戸のあくのを待ちかねて芳夫のそばへびよん／＼寄つて来るボチが、どうしたにか姿を見せません。

芳夫はふしぎに思つて、お父さまやお母さまにお話したいしましたが、誰も今朝見ないといふのです、そこで芳夫は気が気ちやありません、そこらちうを探しました、御近所のお家までも尋ねました。けれども居ませんでした。

「では、誰かに盗まれてひどい目に遭つてゐるんぢやないかしら、それとも殺されたかな。……それともどぶにでも落ちて死んだのか。」

芳夫は、いつまでも／＼探しました。ところが晝ごろ、いつも来る洗濯屋の小僧さんが、

「お家のボチが居りますか。」

と申しますから、

「いいえ、今朝から見えないんで心配してゐます。」

と言ひますと、小僧さんは、

「は、はあ……さうですか、私も、どうもお家のボチらしいと思ひました。それで

は、あの踏切のむかふの魚屋の横に居りました。」との知らせに、芳夫さんはお父さまと一しよに出かけて往きました。

「なるほど、ボチは居りました、首輪に繩を縛りつけられて泥まみれになつて居りました。それは大きな犬につれだされて來たのを、いたづらつ兒にみつかつて捕まへられたのです。」

そこで早速ボチを取戻し、大急ぎでお家に歸りました、芳夫さんは涙のでるほど嬉しがつて、

「あゝボチ、よかつたね、お前死んぢやつたかと思つたよ。」と幾度もく言ひました。

▼教 話

さて或るところに、百匹の羊を持つてゐる牧羊者がありました。その人は非常にや

さしい親切な人でその羊を我が子のやうに可愛がり、百匹の一つ一つに名前をつけて一匹もまちがはずに呼ぶことが出來ました。

ですから、どれが弱虫か、どれがお轉婆か、どれが意地悪るだか、よく知つて居りました。

しかし、どの羊も同じやうに可愛がつて、性質がちがつても、大きさがちがつても手のかかり方がちがつても、決してわけへだてをしませんでしたから、どの羊からも慕はれて居りました。

ある朝、牧羊者はいつものやうに早く起き、羊の檻の戸をあけて、
「おい、みんな起きるんだよ、たのしい野原へ往くんだから……。」と呼びますと、羊たちが眼をさまし、いそぐと驅けだしてまゐりました。

「さあ、住かう……。おほッ、これ／＼そんなにあわてるんぢやない。」

牧羊者は先きに立ちますと、一ばん大きな羊が先頭になつてぞろ／＼續きました。

そして廣い緑色の草のたくさん生えてゐる野原へとまゐりました。羊たちは、「お、これは好いところだ、これまで来たところよりも美味しい草がある……。」「と、大よろこびで食べました。

かうしてゐるうちに、牧羊者は、おいしい水の流れてゐるところを探しました、そしてこんどは其のところへと連れてまゐります。そして、あちらこちらと一日ちう野原で暮らしました。

やがて、太陽が西の空にかたむいて日の暮れも近くなりますから、「どれ、そろ／＼歸へらなければなるまい、今日はいつもより遠くへ来たのだから……。」「と。

と獨語しながら、持つてゐる笛を吹きはじめました。羊たちは、「それ笛が鳴つたぞッ」といつたやうに、草の中に突込んでゐた顔を上にあげて、びよん／＼驅けよつてまゐりました。牧羊者は、うれしさうに、みんなを見

ながら、

「さあ、おとなしくして歸るんだよ。」と言ひきかせて歩きだしました。

ところが、その中の一匹が、「今日の草は、特別においしかつた、さあ、もすこし食べよう。」と慾ばつて歩きながら食べました。

さうですから、みんなの歩くのから、少しづつおくれかけました。「なあに、大丈夫だ、ちよつと驅けさへすれば追ひつけるんだから……。」「と、ゆだんして、みんながすん／＼先きへゆくのに自分ばかりは「あ、おいしいおいしい」と顔を草の中に押し込んでをりました。

そのうちに、ひよいと行手を見渡しましたが、もうみんなの影は見えませんが、「おや見えないぞ、急いで往かう……。」「と、かけだしましたが、やつぱり見えません、右へ

曲つたのか、左にそれたのか、さつぱり解りません。」さあ、困つた、どつちへ往かう」と獨語してみたものの解らう筈はありません、そのうちに日が暮れる、むちや苦茶に歩く、そして細い路の崖ばたを通つた時、あはれ羊は足をすべらして、するくくとつてしまひました。

牧羊者は、いよお家へ着いて、

「さあ、さあ、みんな嬉しかつたらう、めい／＼休むがい／＼ぞ。」

と言ひながら、檻の入口に立つて、一匹一匹また一匹と數へましたが、九十九匹まで數へてもうおしまひ、

「はてな、をかしいぞ、一匹足りないとは、どうしたこと。」

それから、自分も檻の中へはいつて見る、數へなほして見る、やつぱり九十九匹しかゐない、しかも「あゝ、あゐない」と、さうまで解つてまゐりましたから、

「たしかに一匹ゐない、もう數へちがひぢやない、困つたな、どうしたんだらう。斯

うしちやゐられない、大急ぎで探しに出かけよう。」

それから、あわてて若者を呼んで、

「私は、これから野原へ引き返すから、檻の羊は頼むよ。」

「はい、よろしうございます。して、旦那さまは何しにゐらつしやるので……。」

「いや、一匹足りないのだ、迷兒になつたんだ。」

「でも、旦那さま、家は九十九匹もあるんですもの、一匹ぐらゐ居なくなつたつて、

いくら損でもないぢやございせんか。日も暮れました、途中に路の悪いところもありませんから、お危うございますよ。」

「いや、さうしちやゐられない。ただ一匹でも私には可愛い大事なものだ、お金の損はなんでもないが、あれがこの暗くなつたのに、さぞ困つてゐるだらう、このまゝ棄てておいたら、殺されてしまふことかも知れないのだ。」

と、大急ぎで出かけました。

日はとつぶり暮れて、野原はいとど淋しうございました、牧羊者は大きな聲で羊の名をよびました、けれども何にも聞えませんが、ただ山彦がするばかり。それから牧羊者はなほも行きました、路はけはしく片方が崖になつてゐる路にさしかかりますと、下の方から、

「バア、バア……。」

と、かすかな憐れな泣き聲がいたします、牧羊者は「おやッ」と思ひながら、羊の名をよびますと、またも、

「バア、バア、バア……。」

と、あはれな聲。牧羊者は、

「あゝ、たしかに、あれの泣き聲だ、私の羊だ……。ところで、こゝは崖だな、どうしよう。うむ斯して……。」

と、手さぐりで岩や木の根につかまりながらおりて行き、岩と岩との間に狭まつてゐ

る羊を抱きあげて、それからやつと肩にかけ、またも崖から這ひ上り、

「あゝ、よかつた、さあ急がう。」

と、自分の疲れてゐるのも、ひもじくなつてゐるのも忘れて、野を越え谷をわたり、夢中になつてお家へ歸りました。

そして、迷兒になつた羊の體をしらべて、そちこちの傷を包んでやり、

「これから、よく、私の言ふことを聴くのだよ。」

と撫でながら、みんなと一しよの檻に入れてやり、

「あゝ、嬉しかつた、これで安心だ。」

と言つて、牧羊者は大よろこびいたしました。

第二十二課 牧羊者の歡喜

〔罪より救ひ給ふ神・三〕

▼本課の目的

主イエス・キリストは、神に背ける者の改心することを如何ばかりお喜びになるかを知らしめる事。

▼資料

(A) 直接資料……路加傳七章卅六―五十。

(B) 參考資料……路加傳十五章三一―六。馬太傳十八章十二―十四。

▼金言

我とともに喜べ、失せたる我が羊を見出せり。(路加傳十五章六後半)

▼教話の準備

なくした羊を見つけた牧羊者がどんなに喜んだか、もすこしお話しいたしましょう。牧羊者は、羊の傷に手當をし、やすらかに檻に息ませてから、若者に言ひつけて、「これ、一寸おとなりの小父さんと呼んでおいで。」と言ひかけましたが、また思出して、

「おう、それから裏の小父さんにもね。それから、向ひの小母さんにも、一寸おいで下さいませつてな。」

やがて、近所の人たちは、何の用事かと思つて、ぞろ／＼やつて参りました。

「やあ、今晚は。」

「はい、今晚は。」

「御免下さい。」

「さあ、おはいり下さい。」

集まつた人々は、自分ばかりかと思ふと、あつちからも、こつちからも來るので、いよく何事かと思ふと、牧羊者は、

「まあ、皆さん、よくおいで下さいました。斯うして來ていただきましたのは、ほかぢやございませんが、私は非常に嬉しいんでだまつちやゐられないんで、皆さんにも喜んでいただきたいんでお招び申しました。」

「へえ、それはまあ、どんな事で。」

「はい、これから申し上げますが、時に若者、これ、もうちつと火をたいてさ、それから、なんぞ菓子はないか。」

といつて、人々をもてなし、それから今日はどここの野原へ往つての歸るさに、一匹の羊が迷ひだしたことを、それを探しにいつてやつと見つけて歸つたことを、こまごまと物語りました。

人々も、それを聞いて、

「なるほど、それは結構なことをなさいました、ほんとにただの一匹だつて、打棄てちやおかれませんかものねえ。」
と言つて歡びました。

▼ 教 話

イエス様は、ちやうど此の牧羊者のやうに、神さまに背いてゐる人々を、神さまのみもとに連れ歸して、およろこびになりました、そのためには、御自分の疲れたのもひもじいのも忘れて、御傳道なさいました。

さて、或る日のこと、シモンといふ人が、イエスさまをお招びして御馳走を差上げました。その時、十二人のお弟子もその他の人たちも招ばれて來ましたが、其のことを聞いて一人の悪いことをした女が、どこからか入つて來て、イエスさまの後にまはり、泣きながら涙でイエスさまの御足をぬらし、髪の毛でもつて拭ひはじめました。そして、御足がきれいになりますと、こんどは幾度もくそれに接吻しながら、蠟石の函に入れてきた香膏にほひかほを傾けて塗りました。その香膏といふのは非常に値段の高いものでした。

(13)

みんなは、その様子を見ておどろきました。その香ばしい匂ひをかいで、なほのこと驚きました。ことにシモンは、

「イエスさまが、もし人並みすぐれたお方であるならば、これくらゐのことがお判りなさうなものだ、この女は本當にけがれた悪い者なのに、よくも觸らせておいでになる。もしお判りになつたら、こんなことはおさせなされるまいに……。」

と心の中で言ひました。けれどもイエスさまは、何もかもちやんとご存じですから、

「これシモンや、私があなたにききたいことがありますよ。」

と仰しやいました。シモンは何氣なく、

「はい、なんでございますか、先生。」

「それはねえ、或るお金持が二人の人に金を貸してゐた、一人には銀五百で、一人には銀五十だつた。ところが二人とも、とても返せないの、お金持は可憐さうに思つてゆるしてやつたのさ。さうすると二人のうちどつちの人が、よけいに有難く思ふでせう。」

(203)

と仰しやいました。シモンは、

「それや、五百借りた方の人でございます、五十の十倍も助かつたんですもの。」

「さうだ、その通りだ。だからこの女をごらんさい、私の足を洗つて、拭いて、接吻して、膏をぬつてゐる。お前さんは、この女のしたことは一つも私にしてくれない。」

この女はお前さんよりも、餘計に罪が赦されたからだ。女よ、よろこぶがいいよ、お前のすべての罪が赦されてゐる、安心して歸るが好い。」
と仰せになりました。

イエスさまは、まごころから罪を悔い改めて、お頼りする人をどんなにかお喜び下さることとせう、なんと有難いことではありませんか。

丁度、牧羊者が失くした羊を見つけて喜んだお話に似てゐるぢやありませんか。

(一)「さんびか」第一編の四百十四番がこの日の學課に適して居ります。

(二)主イエスがサマリヤの女が改心するやうに懇に傳道し給ひて、疲れも飢ゑも忘れたまふたことを説いてもよろしいと思ひます。

第二十三課 美しき自然

〔萬物に命を與ふる神・一〕

▼本課の目的

自然界に働く神の驚くべき御力の如何に奇しくして偉大なるかを學ばしめる事。

▼資料

(A)直接資料……約百記卅七章六、九、十。詩篇百四十七篇十五—十八。雅歌二章十—十三。

(B)参考資料……天文、地文、博物に関する書籍。

▼金言

神の爲し給ふところは、皆その時にかなひてうるはし。(傳道之書三章十一)

▼教話

今は夏ですねえ。夏の前は何でした？ 春。春の前は？ 冬。さうです冬でした。冬と春と夏と、どんなに違ふか、おわかりになりますか。一つ冬の繪を見せて上げませう、この白いものは何でせう。雪ですねえ、雪は夏には降りません、冬のものです皆さんも、冬のことを思出してごらんさい、どんなことがありましたつけねえ。さうだ、朝早く起きて見ると、お家のまはりに、硝子の針みたいなのが、ぶらさがつてゐたでせう、あれは？ さう「氷柱」です。太陽の光が映ると、ダイヤモンドのやうにキラ／＼光るんで綺麗でしたねえ。

また、山も野原もまつしろで、お池や田圃に氷が張りつめて、おもしろいスケート遊びや、スキヤ／＼や、橋や雪合戦、さては雪達磨などの遊びもできました。

雪がチラ／＼降つてきて、樹の枝にたまつた様子は、まるで綿をかぶせたやうでした、それとも枯木に花が咲いたやうだと言つた方が好いでせうか。

冬のけしきは雪ばかり、雪のけしきはまつしろで、赤いお花や、青い葉ツばは、どこにも見えないやうですねえ。

次ぎに、別の繪をお目にかかせよう。これは春のけしき。さきのは、まるで違ひます、桃や櫻の花が咲いてゐますし、「すみれ」や「たんぽぽ」、「水仙」や福壽草、「つくしんぼう」などいろ／＼の草花も咲いてゐます。——なんとといふ美しいけしきでせう。

きれいな小川が流れて、美しい花の姿が映つてゐます、水の中には鯉がおよいでゐる、野には若草がもえ、田圃には可愛らしい「れんげ草」が敷きつめたやうに咲い

てゐます。——冬のけしきに較べて、全く別の世界のやうでございませう。

さて、その次ぎに別の繪を、それは夏のけしきです。樹といふ樹には花がなくなつて、いづれも緑の美しい葉がしげり、野原も山も緑の布に包まれたやうです。花の色も、黄色い山吹や、薄紫の藤の花、それとも薄紅色の牡丹とさいろに勻もくもく染。そして樹の枝には青い木の實が、青葉のかげに匿れてゐます。

また、野原の間を流れてゐる川では、涼しさうな水あそびや、舟あそびをしてゐます。また向ふの方では釣りをしてゐる人たちもあります。

それから夏のつぎは何んですか。夏のつぎは秋。秋になると此の夏のけしきはどんなに變るでせう。

さうですなえ、この青い葉ツばが枯れて赤く黄色くなります、青かつた果物が赤く熟します。野原も山も錦をひろげたやうになりますなえ。さうく、わけても綺麗になるのは「もみぢ」の葉ツば、みなさんがお手をひろげたやうな形の葉ツばです。

斯うして、春も夏も、秋も冬も、それづくに、ふしぎな變り方をするのは、なぜでせう？ 夫れは、天の神さまが、草や木に命をお與へになり、その命を働かして下さるからであります。

神さまは、まづ命をお與へになり、その命が伸びてゆくのに必要なものをお備へ下さいましたので、花も咲けた實もなるのです。

まあ、此の種子たねですなえ、これはパンジーので、この中に黄色と紫と白い花がかくれてゐます。それから此方はチューリップの球根ねです、この中に、あのきれいな花がはいつてゐるのです。この種子も球根も生きてゐます、命があるのです。

その美しい花を見ようとすれば、まづこの種子と球根を、地の中に蒔くのです。さうすると、それが太陽のあたたかい光や、水のしめりや、地のぬるみで、種の中にかくれてゐた命がそだてられる、そしてだんく伸びてまゐります。

冬の寒い間、それらの命は休んでゐますが、春になると、神さまは、

「さあ、みんな出ておいで。みんなの働かなければならぬ時が来たのだよ。さあさ、きれいな花を咲かして、この世界を飾るのだ。」
と御命令なさいます。

そして雨も風も、日の光も、雪も氷も、みんなの命を育てて立派な働きをさせるのになくてならない物ばかりです。

いよく蒔いた種の芽が、赤ちやんのお指のやうに地面に出てきますが、それが日に日にのびて、その先きがひらいて葉になり、その間から莖があらはれ、莖の先きに蕾が出てまわります。まあ、ふしきではありませんか。その蕾がひらけると、それがあの美しいお花、にこつと笑つたやうな形のお花。——かうした花の咲くまでの働きは、まことにふしぎな命の力です。

また、枯れたやうに見えてゐた樹の枝に、芽がでて、葉がでて、花が咲き、それが更においしい果物になるまでの働きも同じこと。

それから、あの小さなお魚の卵が、小さなお魚になつて、それが三寸四寸と伸びて二尺や三尺もある立派なお魚になりますのも、同じやうな働きでございます。

これらの事が、みんな天の神さまの御力によつて出来ることを思へば、神さまの御工をおどろかすには居られません。さあ、ご一しよに、金言をよくおぼえませう。

▼教授上の注意

本課の教話は、春夏秋冬の特色を鮮かに掲げて説明いたしました。土地によつて充分取捨して戴かなければなりません。雪の國の冬と南國の冬が違ひますし、北の國の春が百花一時に開くのに対し、暖い國は春の花も順次に開きます。

第二十四課 天の住家

〔萬物に命を與ふる神・二〕

▼本課の目的

父なる神が天に營み給へる私たちの住家の麗はしさを、兒童の心に偲ばしめるのがこの學課の要領であります。

▼資料

(A) 直接資料………黙示録廿一章一より廿五章五まで。

▼金言

わが父の家には住處おほし。(約翰傳十四章一)

▼教話の準備

天にある神さまの聖國はどんなにか美しいこととせう、この世の王様の御殿よりもつと綺麗でせうか、お伽噺にある乙姫さまの龍宮よりも立派でせうか。

あの蒼穹に輝く金色や銀色の星は、天のお家の外圍のお飾りでせうか。あの美しいお月さまは、神さまのお國のお提灯かもわかりませんか。

それとも夕方のあの立派な夕映の空はなんでせう、黄金をのべたやうなあの広い広い空、紫や紅や金色の雲は、天のお家のカーテン(幕)かも知れません。さうでせうか、どうでせうか。

われはしのぶ わがふるさを

われはしたふ ちちのみかほを

あまつくのに　こがねのかどを

あふぐまでは　のぞみみたじ　（さんびか第二篇の二百廿八番）

この「さんびか」のやうに、私たちはどうかして天のお家がどんなところか知りた
いものです。聖書の中に、どのやうに書いてあるのでせう。

▼教　　話

イエスさまは、十字架におかかりなさる前、お弟子たちに、

「私は、まもなくお前たちと別れなければなりません。けれども、お前たちを棄てて
ゆくのでなく、お前たちのお家を天にこしらへるためにゆくのです。私がさきに往つ
て、出来上つたら又迎へにまゐります、心配することはありません、ただ神さまと私
におたよりなさい。」
とお話なさいました。

それからイエスさまは、十字架におかかりなさつて、三日目にお甦りなさいましたが
その時のお體は、死ぬこともなく、病氣にかかることもないふしぎなお體でした。そ
れが多分、天の聖國に住まふ人の體のお手本でせうと思ひます。

そしてイエスさまは四十日目に、天にお昇りなさいました、目に見えるお姿で、み
んなが「あれよく」と驚くうちに、一メートル、二メートルと、上へ上へと高くお
離れになつて、やがては雲の彼方へと見えなくおなり遊ばしました。

そして残されたお弟子たちは、イエスさまのおいでなされた聖國はどんなところで
せう。いつ自分たちを迎へにおいで下さるだらうと考へました。

お弟子たちは、傳道のために、あちらこちらで、ひどい目にあひましたが、そのた
んびに、此の世の中でどんなに苦しめられても、私たちは天のお家へゆくのですから、
しばらくの我慢だ、此の世界よりも、もつとく美しいお家へゆけるのだと思ひなが
ら働きました。

そしてお弟子の一人ヨハネといふ人は、傳道のために責められて、バトモスと言ふ島に流されて、毎日淋しく暮してをりますと、ある日のこと、ふしぎな聲を聴きました、それは神さまのお聲でした。

ヨハネは、おどろいて、振り返りましたが、そのお姿は神々しく輝いて、見つめることができません。ヨハネはよろめいて地に倒れますと、そのお方はヨハネの肩の上
に手をおいて、

「これ怖がるんぢやない、私だよ、私はさきに死んだことがある。」
と仰せになりました、そこでヨハネは、

「あゝ、イエスさまだな。」

と解りました。さうするとイエスさまは、

「私は、これからいろいろの事をお前に見せるから、それを委しくお書きなさい。」
と仰せられました。ヨハネはどんなことを見せていただいたのでせう。——それは、

見たい／＼と思つてゐる天の聖國の様子でありました。

ヨハネは、見た通りを書かうとしましたが、それがこれまで一度も見なかったものばかりでしたから、一々それをはつきり書きとめることが出来ませんでした。しかもその美しいこと、おごそかなこと、とても筆や紙に盡くすことが出来ませんでしたけれども、一生けんめいになつて書きました、わからない物の名前などは、この世界にある物にくらべて、できるだけ私たちにも解るやうに書きました。

まづ、ヨハネがじつとじて見てをりますと、天にある開けてゐる門が見えだしました。そして、「こゝへおいで、これから先きにおきることを見せてあげよう」といふお聲がいたしました。

ヨハネは、その御門のそばへ往きますと、奥の方に神さまのお座りになる、なんともいへない立派な御座所があつて、そのまはりに二十四の輝くお椅子があり、白い輝く着物に、金の冠をかぶつた二十四人の人々が腰をおろし、そのあたりに虹がかつて、

非常な美しさ。

それから御座所のまはりに、何萬とも數へきれない天の使がゐて、大きな聲で、イエスさまをほめたたへる歌をうたひました。その歌は四方にひびき渡つて、たとへようもない好い音楽でした。

そのつぎに、イエスさまはヨハネに、七つの封印を解いてお見せになりました。その一つ一つを解いたんに、非常にふしぎなことが見えました。

その次ぎに、七人の天の使が各々一つ宛のラツバを神さまから頂戴してまゐりましたが、一人が一つを吹いたんに、いろ／＼の事が起りました。

斯のやうないろ／＼の事が過ぎまして後、一人の天の使がヨハネを高いお山の上へつれてゆき、天の都、イエスさまを信する人々の住ふお家のある町を見せました。

その都の立派なこと、ヨハネはどのやうに書いたら、その様子が言ひつくせるか、あつけにとられるほどでした。——まづ町全體が輝いてゐて、大きな寶石のやうに見

えました。町は石垣で圍んであつて四角になつてをり、御門が三つ宛、四方にありました。その石垣はただの石ではなくて縁の玉を積みかさねたものでした。それから御門は眞珠で、石垣の土臺は十二色の寶石をかさねてありました。

その美しい圍ひの中にあるお家はいづれも透る純金で、人々の歩く路は金でした。泥や埃は見たくとも見られません。そこに住む人々は、悲しいことも、苦しいこともございませぬ、いつでも楽しいのです。また御病氣になつたり、死んだりすることもありません。

また、その都は寒くて困るとか、暑くてせつないなどといふこともありません。太陽や月もありません。イエスさまがおいでなされるので、すこしも暗いことがありません。そして、みんなが親切ですから、憎んだり、怒つたり、喧嘩する聲などは少しもいたしません。盗人もありませんし、酔ッばらひも居りません。どの人の顔も、愛にかがやき、歡びにみちてをりました。

ヨハネは、その幸ひな様子を見て、うつとりとなりました。その時イエスさまは、「お前の見たり聞いたりした事は、いづれ近いうちに現はれて來ますから、書きとめたことを、早くみんなにお見せなさい。」と仰せになりました。

聖書の一ばんおしまひにある「黙示録」といふのは、それでございます。

第二十五課 矯風學課

▼本課の目的

兒童は稍々もすれば自分よりも弱い者を苦しめたり、かよわい動物を虐待するものゆゑ、その非なることを教へ、それを矯正せんとするのです。

▼資 料

(A) 直接資料……哥林多前書十三章四―七。

(B) 參考資料……聖フランシスの傳、また鹽原多助の話の一部もよし、その他動物愛護美談やアブラハム・リンカーンの逸話等。

▼金 言

よわき者をかへりみる者はさいはひなり。(詩篇四十一篇一)

▼教話の準備

親切といふものは世界で一ばん美しい寶物です、この寶物を澤山持つてゐる人は幸ひな人です。さうですから私たちは親切なことをいたしませう。私たちのまはりにも

る人には誰にても親切——やさしく、すなほに、丁寧——にして上げませう。
ただ、人だけでなく、鳥にも獣にも虫けらにまでも、やさしくしてやりませう。それがどんなに嬉しいことかわかりません。

自分よりも弱い小さいお友だちを苛めて偉らがつたり、小鳥や虫けらを苦しめたり殺したりして威張ることは、けつして善いことではありません。

誰にでもやさしく、誰をも可愛がつて上げる人こそは、本當に偉い人です。皆さんは聖フランシスのお話をおききになつたでせう。また鹽原多助が馬を可愛がつたお話をききになつたことがありますか。また大統領リンカーンのこともおききになつたことがあるでせう。この人々は人に親切であつたばかりでなく動物までも可愛がつたのです。

親切といふ寶物を澤山持つてゐる人は、金や銀の寶物を持つてゐる人よりも幸ひです。あなたは、どれだけ持つていらつしやいますか。いちわる、わがまま、むじひ、

らんばう、などといふものを持つてゐませんか、そんな物は、泥やせとかけみたいな物ですから、お棄てなさい。

▼教 話

あるとき、野原で、一人の子供が樹の枝にとまつてゐる小鳥に、石を投げようとして居りますと、いつのまにか、どこかのお爺さんがやつて来て、

「これ、坊ちゃん、坊ちゃん。何をするんですよ、石なんか投げちやいけません……。」と申しました。

「でも、おもしろいんですもの。僕あの小鳥にうまく當てようと思ふんです。」

「いゝえ、それはいけません、坊ちゃん。」

「でも、ヒューツと投げて、ぱさりと小鳥が落ちたら、ずるぶん面白くないつて？
鐵砲で打つたやうに當つたら……。」

「いゝえ、ちつとも面白ありません、小鳥を殺して、何が面白いのです。」
「でも……。」

と子供は、まだ解らないやうな顔をしてゐますと、お爺さんは、

「それでは坊ちゃん、一つお話をして聴かせませう。」

「えッ、お話？どんなお話？」

「ほんたうにあつたお話です。」

「ほんたうにあつたお話？」

「それはねえ、今から五十年も前のこと。」

「ぢや、僕なんか生れない先きのことですねえ。」

「さうです、丁度私があなたぐらゐの少年だつたのです。その頃、あなたのやうに石投げが大好きで、毎日、石を投げて遊んだのです。ある時はお池や川を越して彼方へ投げるお稽古を試みたり、またある時は林や森の幹を的にして投げてみたり、いろ

んなことをして練習したのです。そしてだん／＼當てることが上手になりました。

そこで私は、ただ投げて遊ぶだけでなく、もつと面白いことをして見たくなつたのです。」

少年は、しだいにお話につりこまれて、——それはどんなことだつたでせう——と考へました。

お爺さんは、

「それでねえ、丁度いゝことがありました、といふのは、私の近所の畑の納屋に燕が巣をつくりましたから、あれが好い、あれが好いと思ひました。」

その納屋といふのは畑のまん中ですから、ほかの人にあたるといふ心配もなし、あれを一つの的にして燕を撃つて見よう、きつと當るにちがひない、面白い／＼と、やつて見ないうちから喜んでをりました。

そして、格恰の好い手ごろの小石を五つ六つ拾つて、そらッとお池へやつてゆき、七

八間はなれたところから、よく睨みをさだめ、一、二、三と口のなかでいひながら燕の巢を目がけて投げました。ところが、どうでせう、小石はねらひたがはずヒューツと巢にあたつたかと思ふと、燕は飛びあがる、巢がこはれる、それから小さい雛の燕が二羽ばさりと下へ落ちました。

たつた一つの小石がなんといふ偉いことをしたのか、私の腕前もうまいもんだとつくづく嬉しくなる、あゝ面白い、と躍るやうにして、寄つてゆきますと、どうでせう、二羽の親燕が地ひたに落ちたひよつこのところに集まつて、ピーピーピーツクと悲しさうな聲をだして鳴くのです、その鳴き聲はなんとも哀れなものでした。

ひよつこはと見れば、二羽とも眼をつぶつて死んでゐる、その可憐さうな様子、なんといふ痛々しさでせう。

その時、私は「あゝ悪いことをした、罪のない小鳥を二羽までも殺してしまつた、この小鳥の親たちが、どんなに悲しいこととせう。」としみじみ考へました。

親鳥はいつまでも鳴きました、私はその様子を見るに忍びませんでした。ですから、やつとのこと死んだ小鳥をひろひあげ、丁寧に地の中に埋めてやりました。さうすると親鳥も仕方がないと思つたものか、こはれた巢のつくろひをやりはじめて、幾日か後に、もとのやうに直しましたが、いつ見ても悲しさうな様子をしてをりました。

その時から、もう五十年も過ぎた今になつても、私はその時のことを忘れません。そして其の時よりもだんじり年をとるに従つて、考へることが深くなり、ますます悲しい痛ましい心をおこすのです。

私の投げた石が、小鳥にあたりましたが、それがまた、はね返つてきて私の心に當つたやうなもので、その時からの痛みはいつまでも癒りません、なんといふ辛いこととせう。

坊ちゃん、あなたが、あの小鳥に石を投げようといふのですか。それは、あなたの心に投げつけるやうなものです。ただ一寸のあひだ、あゝ面白かつたと思つても、そ

れがために何十年といふこと、苦しい思ひをしなければなりませんよ。どうですか、わかりましたか。」

と言ひました。少年は、いつしか手から小石を放しました、そして、

「お爺さん、わかりました、もう小鳥に石を投げることは止やませう。」

と答へました。お爺さんは、

「お、よく解つて下さつた。あれ小鳥はあんなに楽しさうにしてゐますもの！」
と言ひながら、むかふの方へゆきました。

弱い者や、頼るべなき者を苛めることは、やがて自分を苛めるやうなもので御座います。さうですから、私たちは自分より弱い者や小さい者にたいして、決して威張つてはいけません、できるつたけ親切やさに柔やさしくしてやりませう。

第二十六課 復習學課

〔萬物に命を與ふる神・三〕

▼本課の目的

イエス様は、天に於て彼を信する者のために榮えある住家を營みたまふことを教へるのが此の復習の目的です。

▼資 料

(A) 直接資料……第廿三課および第廿四課。

(B) 参考資料……

▼金言

われ汝等の爲めに所を備に往く。(約翰傳十四章二)

▼教話の準備

私たちの住んでゐる此の世界は、まことに立派な美しい處です、春夏秋冬と變るそのふしぎ、その見事なこと、これは神さまが私たちに何十年かの間住むところとして、お造り下さいましたのです。

ある人は、この世界に九十までも百までも住まひますが、ある人は四十か五十になるまで住みます。またある人はたつた十年か十五年しか住みません。それどころか僅か五年か六年しか居ない人もあります。

そのやうに短い間だけ暮らす場處ですのに、この美しさ立派さはまことに勿體ない

ほどでございます。

そして此世の暮しが終つたら、私たちは何處へゆくのでせう。主イエス・キリストを信する人々は、天にある住家にあつめられるのです。そこを天國とも言ひますし、神さまの聖國とも申します、そこに往つた人々は何千年も何萬年も幸ひに暮します。死も病ひもないところですから、限りなく生きるのです。

たつた百年たらずの間、暮しをする此の世界でさへ、こんなに立派ですから、まして限りなくいつまでも暮らす天の聖國はどんなに立派だかわかりません。

その様子を、夢のやうに見せていただいた人はどなたでしたか、さうイエスさまのお弟子のヨハネでした。

ヨハネは、その時のことを書きとめましたねえ、それは何といふ御本の中にありますか。また其の様子をどんなに書きましたか。今日はそのおさらひを致しませう。

(いろいろの質問によつて復習をする)

▼教 話

聖書の中に、神さまが私たちのためにお備へ下さいました天の住家は、見たこともなく、聞いたこともなく、考へることも出来ないほど立派なすぐれた處ですと書いてございます。

「そのすぐれた天の光景を、此世にゐながら見せていただいたのはヨハネさんでした、この方はもう九十といふお爺さんになつて居りました。」

イエスさまが、天にお歸りになる日の近くなつた時、お弟子たちに、

「私は間もなく、お前たちに別れて天に歸らなければならない、けれども、私はお前たちを棄ててしまふのでなく、お前たちが天に往つてから暮らすお家をこしらへるためなのだ……。私がさきに往つてお前たちの來るのを待つてゐます。」

とお話なさつた時、ヨハネはイエスさまのちきお側にゐて伺ひました。その時は同

じお弟子のペテロやアンデレ、ヤコブやピリポも一しよに居りました。

けれども、月日の経つうちに、その人たちが一人去り二人去り、みんなイエスさまのみもとに往つてしまひました。そしてヨハネは白髪頭のお爺さんになつても此の世に残つて、神さまの御用をいたしましたが、その時の人々が、すゐぶんヨハネを苛めましたので、ヨハネは、

「親しいお友だちは、みんな天の聖國へ往つてしまつた、そこはどんなに美しいところでせう、ペテロやヤコブや、アンデレやピリポたちは、どんなに楽しく暮してゐるでせう。イエスさまが、私たちのためにおこしらへ下さつた住家はどんなに立派でせう。私はいまだに此の世にゐて、イエスさまを知らない人々にいぢめられて、おまけに島流しにまでされて、この年をしてこんな淋しい牢屋にいれられてゐる。しかしこれも神さまの思召しだから止むを得ない。」

と思つたのです。ところがイエスさまはヨハネを可憐さうだとおぼしめしたものが、

その淋しいバトモスの島にゐながら、天の聖國の様子をお見せ下さいました。

それが、どんなにヨハネの心を慰め、またヨハネから教へられた人々が、どんなに信仰をばげまされたことかわかりません。

そして何年かのちに、ヨハネは島流しをゆるされて歸りましたが、どこへ往つても天の聖國のことを人々に語りつたへ、

「私たちは、やがてそこに往くのだから、おたがひに親切にしなければなりません。」と申しました。

ヨハネは、それから間もなく、安らかに此の世を去つて、ながいこと待ちのぞんでゐた天の聖國に移されました。どんなに嬉しかつたかわかりません。

▼例 話

私がハワイの或る島に往つた時でした、とあるお家にまゐりますと、そこのお母さ

まは、

「明日、私の娘が歸つてまゐります。」

と言つて大そうよこよんでいらつしやいました。私は、

「さうですか、どこからお歸りになりますか。」

とたづねますと、

「こんどアメリカのコロンビア大學を卒業しましたから、五年ぶりで歸つてくるのです。私はうれしくつてたまりません。さうですから、家の掃除もいたしましたし、お道具の手入れをしましたし、椅子やソファ(長椅子)の布も新しいのに張替へました。」と申しました。

お母さまは、斯うして久し振で歸つてくるお嬢さんを待ち、いよいよ汽船の着く朝になりましたら波止場へ迎へにおいでになりました。

私は思ひました。さうだ、丁度このやうにイエスさまは、私たちのために天の住家

初等科教案

我等父なる愛の神

第三期學

を用意してお待ちになつて居らつしやるのだ……と。……と。皆さん、金言になんとありましたねえ。さう、「われ汝等のために處を備へに往く」と。

▼教授上の注意

(一)本課は復習學課でありますから、なるべく生徒をして答へしめ、既に教へた事柄の記憶を深くせしめます。

(二)本課の内容は、主として第二十四課の叙述を反復して居りますが、復習學課だけに止むを得ません。しかし前項にも申しましたやうに、なるべく生徒に答へしめつゝ、繰返して印象させるのです。

序

- 一、本教案編纂の爲めに文學委員會が組織されたのは大正十二年大震災直後のことであつた。爾來孜々として其計畫を進め、實行に入り、滿四年の日子を費やして、豫定通り茲に十一ヶ年の課程順序による教案出版を完成することを得たのは欣快に堪えざる所である。
- 二、本巻は初等科の内の三年に屬するもので、下巻として下半二學期を含み、野邊地天馬氏の起稿執筆に係り、村岡花子氏の閲讀を得たものである。
- 三、教案の事たる日曜學校事業の骨髓とも云ふべく、かゝる大事業の完成は一朝一夕を以て期せらるべきでない。余は本教案が廣く各日曜學校に於て使用せられ、直接教授の任に當つた諸兄姉、又一般の諸賢が其足らざる所に對して示教を惜しまれざらんことを希ふて止まない。

四、本教案の完成に就ては多くの人を煩した。高崎能樹、鈴鹿正一、野邊地天馬、由木康、田泉保興、岩村安子、村岡花子、高田弘子、中澤咲子の諸氏は終始委員として力を盡くされ、北島つや、光静枝兩氏は或期間は委員たり、錦織貞夫、龜井ふさ子兩氏は或部分を執筆せられ、上澤謙二、コールマン兩氏は全體の計畫、進行並其事務に當られた。猶今村正一氏、海老澤亮氏、岩村清四郎氏等にも負ふ所多い。記して厚き感謝の意を表す。

昭和二年九月

龜 德 一 男

教案十一ヶ年課程排列表

科 別	年 齡 (滿)	主 題	編 纂 主 意
幼 稚 科	五	優しき神と其よき世界	題 目 的
初 等 科	六	愛の神とそのよき子供	題 目 的
	七	吾等の模範なるイエス	
中 等 科	八	吾等の父なる神	歴 史 的
	九	神の子供の生活	
	十	舊約建國物語	
	十一	キリスト物語(三學期) 傳道者並改革家列傳(一學期)	
高 等 科	十二	舊約王國物語	社 會 的
	十三	使徒時代表	
	十四	イエス傳	
高 等 科	十五	〔基督教的生活(三學期) 近代基督教的指導者(一學期)〕	社 會 的

新刊			既刊			
高等科	中等科	初等科	高等科	中等科	初等科	幼稚科
基督教的生活 <small>(附近代基督教的指導者)</small>	舊約王國物語	我等の父なる神	使徒エテス 基督教的生活 傳代	舊約王國物語 <small>(附傳道者並改革家列傳)</small>	舊約建國物語 キリスト物語 我等の子供なる神	優しき神と其善き世界 愛の神と其よき子供 我等の模範なるイエス 神の子供なる神
下	下	下	上上上 下下	上上上 下下	上上上 下下	上上 下下

[錢六料送 錢五拾七冊各價定]

本教案を使用する方々へ

◇本教案の標準

この教案は、初等科二年用で、小學第二學年向きのものがあります。初等科は三年で終了いたしますから、本教案はその中間でございます。

◇本教案の目的

前一ケ年間の初等科教育によつて築かれた生徒の宗教的觀念に、一層新しいものを加へ、これを養ひ、これを育て、一段と發達せしめようとするものであります。

◇本教案の形式

この時代の生徒は非常に童話を好む時代で、童話によつて知識を弘め、徳性を涵養

する時期でありますから、やはり童話によつて宗教心を養ふやうに企てました。それゆゑ、學課をすべて童話の形式で叙述いたしました。即ち童話が教育上に及ぼす効果の如何に甚大であるかは、最近著しく認められるやうになりましたから、本教案はその形式に依つて効果を收めようとしたので御座います。つまり平面的な叙述の代りに立體的な描寫をしたつもりであります。童話を好む生徒に對して宗教童話を供給することは、パンを求むる者にパンを與へる所以であると存じます。

(2)

「教話の準備」と「教話」を區分してありますが、要するに區別する必要はありません。ただ時間の都合によつて省略する時の便宜を示したのでございます。

◇教案の排列

(1) 造主にして父なる神 (第一課より第二課まで)

- (2) 父なる神とその善き賜物 (第三課より第五課まで)
- (3) 神の愛護と我等の感謝 (第六課より第十課まで)
- (4) 保護者なる神 (第十一課及び第十三課より第十九課まで)
- (5) 禁酒學課 (第十二課)
- (6) 罪より救ひ給ふ神 (第二十課より第二十二課まで)
- (7) 萬物に命を與ふる神 (第二十三課及び第二十四課と第二十六課)
- (8) 矯風學課 (第二十五課)
- (9) 幼兒に語り給ふ神 (第二十七課)
- (10) 神との交通 (第二十八課、第二十九課)
- (11) 禮拜 (第二十課より第三十二課まで)
- (12) 神の喜び給ふ行爲 (第三十三課、第三十五課より第三十七課まで、并に第四十一課より第四十七課まで)

(3)

(13) 感謝日學課(第卅四課)

(14) 神の最善の賜物(第卅八課より第四十課まで)

(15) 紀元節學課(第四十三課)

(16) 神の仁慈(第四十八課より第五十課まで、及び第五十二課)

(17) 復活節學課(第五十一課)

以上の學課のうち、幾分か叙述の重複するものがあります、これは止むを得ないことであり、又一面にはこれあるがために、生徒の記憶を喚起することにもなりますしまた生徒の方でも適度の繰返しは厭はぬもので御座います。

たとへば、第一課と第二十課。第八課と第十七課。また第一課と第四十九課。第十二課と第四十四課などが重複するものです。

◇教授上の注意

(一) 教授には言語は平易に、意味は明瞭にし、一學課は一つの主意、一つの目的、一つの教訓に歸着するやう努めたく思ひます。

(二) 耳のみによらず、眼よりも習得させるならば、一層印象が深いのですから、地圖や繪畫によつて教示し、また黑板によつて説明することが望ましいのです。

(三) 參考資料に圖書名を掲げましたが、著者名を省きました。それは著者の何人たるを問はず、ただ優秀なものに據ればよろしいのです。

(四) 一ケ年のうちに數度の特別學課があります、即ち禁酒學課。矯風學課。感謝日學課。クリスマス學課。復活節學課でありますが、復活節は三月でなく四月にあるのが普通ですから、當日の學課と復活節學課とはあらかじめ入れ替へて教授するが宜しいと思ひます。

◇心理學上より見たる初等科時代

(一)此の期(滿六年―滿八年)の生理的發達の特徵とも云ふべきは、身長の第一擴張期(滿四年―滿六年)の終り、體重の第二充實期(滿七年―滿九年)の初めで、頭骨は殆んど完成し、官能も稍々完成に近づき、男女性別の初期であつて感受性の最も旺盛な時であります。

(二)心理的發達の特徵として特に教育上留意すべき點は左の諸項であります。

(イ)求知心旺盛で好奇心に燃え、見たがり聞たがり仕たがる時代で、即ち教育上直親教授の最も有效な時代であります。

(ロ)この頃から客觀の主觀化する時期に入るので、幼稚ながら世界觀が芽ばえ始め、又僅かに抽象期に入る故具體的教授を主とせねばならぬ時代であります。

(ハ)學習能はまだ貧弱であるが機械的記憶が旺盛な爲め記憶の把持は中々強い。主の祈、その他誦誦を必要とするものを教ふるのに好い時代であります。

(ニ)社交本能が次第に著しくなつて來る故、社會生活を訓練するに好い時期に進んで

行く、然し此の時期を狩獵期と云つて、辨別作用、好奇心、社交心、人物崇拜などが著しくなる一面に、残忍性や好闘本能までが頭を擡げ出して來る故警戒を要する點も多くなつて參ります。

(ホ)感情の特色は主我的で、名譽心、羞恥心、好闘本能などが著しくなつて來るが、又情操の發動として善惡邪正、快不快、眞善美などを辨へて來る故宗教的眞理を會得するによい素地を持つて來ます。

(ヘ)遊戯に表はるゝ特色から云ふと、主として團體遊戯を好み、鬼遊び、隠れん坊、戦争ごっこ、旗取り競争、遊戯などに興味を持つ頃故、衆團的教育をするに適する時期で禮拜的訓練が最も効果を擧げる時であります。

(二)宗教心理の發達 から云へば、ジエームスの所謂「回心の根本動機たる服従と模倣」の意識的發達を見る時で、更に精しく云へば、

(イ)服従……は盲目的服従から漸く意識的服従に進み、自發的に人生の規則、或はイ

エスの教訓に従ふことに努めるやうになる時期で、宗教的生活を盲目的から意識的に進め、克己的服従から奉仕的服従に導くに好い時期であります。

(ロ)模倣……は反射的模倣や可型的模倣(無意識)の境から次第に遊戯的模倣や、意志的模倣(即意識的)に進んで行く時で、即ち人擬(エービンク)から實踐窮行(イミテーション)へ進む過渡時代であつて、宗教的習慣の建設と信仰生活の訓練とに好い時期であります。

◇お断り

この教案は教師諸氏の御参考に供するもので、取捨選擇を任意にし、生徒の環境や経験に応じて適當に應用して戴きたいのであります。

初等科第二二年教案目次

我等の父なる愛の神 (下)

序文

本教案を使用する方々へ

第三學期 (十月・十一月・十二月)

- 第二十七課 幼きサムエル……………(一)
- 第二十八課 エズラノ祈禱……………(二)
- 第二十九課 ダビデの感謝……………(二八)
- 第三十課 神殿の建築……………(三六)

第三十一課	河畔の禮拜……………	(三二)
第三十二課	復習學課……………	(三七)
第三十三課	ヨセフの災難……………	(三四)
第三十四課	感謝の歌……………	(五三)
第三十五課	ヨセフの親切……………	(六一)
第三十六課	少年牧者……………	(七三)
第三十七課	ダビデの音楽……………	(八一)
第三十八課	クリスマス學課……………	(九一)
第三十九課	最大の賜物……………	(九九)

第四學期 (二月・三月)

第四十課	博士の禮拜……………	(一〇一)
------	------------	-------

第四十一課	ヨセフの孝行……………	(一一五)
第四十二課	ザレバテの女……………	(一二四)
第四十三課	紀元節學課……………	(一三三)
第四十四課	ダニエルの友人……………	(一四三)
第四十五課	シユネムの客間……………	(一五一)
第四十六課	奴隸の少女……………	(一六〇)
第四十七課	復習學課……………	(一六九)
第四十八課	造物主なる神……………	(一七七)
第四十九課	神の保護……………	(一八四)
第五十課	近く在し給ふ神……………	(一九三)
第五十一課	復活節學課……………	(一九八)
第五十二課	神への謝恩……………	(二〇六)

初等科教案

第三學期（十月・十一月・十二月）

第二十七課 幼きサムエル

〔幼兒に語り給ふ神〕

▼本課の目的

天の父はアブラハムやモーセや預言者に語り給ふごとく幼き者にも御聲をきかしめ給ふことを教ふ。

▼資料

- (A) 直接資料……サムエル前書一章、二章十八、十九、廿六および三章。
(B) 参考資料……聖書物語文庫、聖書物語、舊約物語。

▼金言

僕聽く、エホバ語りたまへ。(サムエル前書三章九)

(2)

▼教話の準備

父なる神さまは、ノアに「方舟をおこしらへなさい」と仰せられたことや、エリヤに「アハブ王のところへ往けよ」と、お命じになつたことは、ずつと前にお話しいたしましたが、今日は、幼い子供にも神さまがお話しくださることを學びませう。

神さまは、偉い人や、大人たちにお話しくださるだけでなく、小さい子供にもお聲をおかけくださいます、なんと有難いこと、また嬉しいことではありませんか。

▼教話

むかし、サムエルといふ子供がありました。その名の意味は——神さまがお聴き下さつた——といふのでした、すゝ面白意味ではありませんか。

サムエルのお父さんはエルカナといひ、お母さんをハンナと申しました。ユダヤの國のエフライムといふ地方のある山里に住んでをりました。

けれども、お母さんのハンナには長いこと子供がありませんでした、さうですから明けても暮れても、どうかして子供を欲しいものだ、どうして私は子供を産まないのせうと、考へて悲しく思ひました。そして或る時などは、御飯をたべないで泣きました。お父さんのエルカナは、かはいさうになつて、

(3)

「そんなに泣いても仕方がない、お前はここの家の大事な人だ、それがそんなにくよくよしてはまことに心配だ、どうか元氣をお出なさい、それには神さまに願ひするにとだ、神さまは私たちをかはいさうにお思ひになり子供をお與へ下さるに相違ない。」と言つて慰めました。

そして、ある時二人は神さまを拜むためにシロといふ町へゆきました。それはその頃、お祈りをしたり献物をしたりする幕屋——テント造りの神殿——がシロにあつたためでした。

ハンナは、幕屋のなかで、泣きながらお祈りいたしました、そのお祈りは斯うでした。「神さま、どうぞ私に男の子をお授けくださいまし。もしお授けくださるならば、その子は神さまに献げて、一生のあひだ神さまの御用をつとめさせます。頭に髮剃をあてません。」

頭に髮剃をあてないのは、「神のナザレ人」にするといふことで、むかしの律法にあ

りましたが、その意味は「神に献げたる者」といふことでした。

ハンナは、いつまでも、繰返し／＼お祈りいたしました。この様子をエリといふ大先生が見てゐらつしやいましたが、離れてゐてその聲がきこえませんから、ハンナのことを女の酔漢だと思ひました。

「おゝ、これ／＼、酔ばらつてなんか來ちやいけないよ。いつまで、そこにぐづ／＼してゐるんだ。さあ、お歸りッ。」

と叱りつけますと、ハンナはおどろいて、

「先生、私は酔漢ではございません、まことに悲しいことがありますために、苦しきもだえて立ち去りかねてゐるので御座います。決してお酒を飲みはいたしません。」

「おゝ、さうか、それは氣の毒なことだ。その悲みといふのは、どんな事だ。」

「はい、私は夫のエルカナのところへお嫁に來まして久しくなりますが、一人も子供がございませぬので……、子供をお授け下さいとお祈りいたしました、そしてもし授

けていただきましたら、「ナザレ人」にして神さまに献げようと思ひます。」

「あゝ、それは感心な心がけである。神さまはきつと、その祈りをおきき下さるだらう。心配することはない、くよくよ悲しんだり泣いたりしたつても、何にもならぬことだ。」

「はい、有難う存じます……。」

と言つてやうやく立上りましたが、それからといふもの、ハンナは、もうくよくい
たしませんでした。そして、ふしぎや、一年たらずのうちに玉のやうな赤ちやん、し
かも男の赤ちやんを産みました。——ハンナの喜びは非常なもの、

「あゝ、神さまが私のやうな者の祈りにおこたへ下さつて、このやうな可愛い男の子
をお與へ下さつた。神さまに聽いていたゞいたのだから、サムエル——エホバに聽か
る——と呼びませう。おゝ、それが好い、それが好い……。」
と、その名をサムエルとつけました。

ハンナは、サムエルを育てるのに一生けんめい、どうかして立派に丈夫に、怪我の
ないやうにと心をこめました、そして乳ばなれするまではシロにまわりませんでした
が、いよく乳ばなれするやうになりましたから、ハンナはエルカナと相談いたしま
して、牛三頭、麥の粉一斗、それからまだ他のおみやげを持ちましてシロへゆき、幕
屋へまわりまして、

「どうぞエリ先生に、お目にかかりたう存じます。」

と、取次ぎをたのみますと、まもなくエリのところへ案内されました。年をとつたエ
リはハンナを見て、

「はて、お前は誰だつた？」

と申しました。

「はい、私はエルカナの妻のハンナと申すものでございますが、この前、酔漢かと思
はれるほど心みだれて泣きながらお祈りいたしました女でございます。」

「お、さうか、なるほどあれがお前だつたのか、子供が欲しいつてな……。」
「はい、左様でございます。有難いことに、神さまは、此の子をお興へくださいました。」

「あ、エホバの神さまは、ほむべきお方だ。」

「そこで、私は神さまにお約束いたしましたやうに、此の子をささげます。」
と言つて、まだ幼いサムエルを、エリに見せました。そして牛や小麦は祭壇の上にそなへて神さまへの供物にいたしました。

ハンナは、お禮のお祈りをいたしました、この前氣も狂はんばかりに悲しんで泣いたのに、今はよろこびにみちあふれてゐます。

この時からサムエルは幕屋のうちに、エリのもとに養はれました、お父さんやお母さんが一年に一度づつ、来て下さいました。そしてサムエルは一年また一年と大きくなつて可愛らしい少年になりました。まことに、やさしい正直な少年で、よくエリの

言つけを守つてはたさきました。さて或る夜のこと、サムエルが寝てをりますと、

「サムエル、サムエル！」

と呼ぶ聲がいたしましたから、サムエルは眼をさまし、別の部屋にねてゐるエリのところへゆき、

「先生、お呼びになりましたか。」

「いいや、呼ばなかつた、歸つてお休み」

はいと言つて、寢床にはいりましたが、しばらく眠ると、また、

「サムエル、サムエル！」

といふ聲に目がさめる、どうも先生がお呼びになつたにちがひないと思つて、エリのところへゆく、さうすると、

「呼びやしないよ、歸つてお休み！」

と言はれました。サムエルは又々寢床にはいつて眠りますと、やがて

「サムエル、サムエル！」

といふ聲、サムエルは起きてゆき、

「先生、やつぱりお呼びになつたでせう。」

エリは目をさまして、

「いいや、呼びはしなかつた。」

「でも、これで三度です。たしかにサムエル、サムエル！とお呼びになりました。」

エリは、それをさいてゐましたが、うなづいて、

「あゝ、わかつた。お呼びになつたのは天の神さまだよ。私は呼びやしない。では、こんど若しお聲がしたら、はい私でございまするか、ここに居ります、どうぞお話し下さいましと申上げてごらん。」

サムエルは、自分の寢床へもどつて休みました。さうすると夜中に、またも、

「サムエル、サムエル！」

と、お聲がいたしましたから、エリに教へられたやうにお返事を申しますと、それがやつぱり神さまのお聲で、神さまはサムエルに、これから先き、世の中にどんな事が起るか、いろ／＼大事な事についてお話しになりました。――斯うして神さまは、まだ年のいかない幼い少年に、大事なことを仰せになつたのです。

第二十八課

エズラの祈禱

〔祈禱によりて神と語る・一〕

▼本課の目的

天の父は我等の祈に耳を傾けて聽許したまふことを教ふ。

▼資 料

(A) 直接資料……エズラ書七章、八章、十五、および廿一——卅四。
(B) 参考資料……聖書物語文庫。

▼金言

すべてエホバを呼ぶ者にエホバは近くましますなり。(詩篇百四十五篇十八)

▼教話の準備

神さまは、サムエルをお呼びになりましたが、サムエルも神さまにいろいろとお話をいたしました。斯うして神さまとおはなしをすることをお祈りと申します。

お願ひすることも、お禮をいふことも、みんなお祈りの一つです、サムエルは、幼い時神さまとおはなしを始めてから、年をとつて死ぬまで毎日お祈りをして暮しました。神さまはその祈りの一々に耳を傾けてお聞きくださいました。

そのやうに私たちのお祈りは、神さまに聴いていただけるのです。今日はエズラといふ人がお祈りをした時のおはなしをいたしませう。

▼教話

むかしユダヤの國がバビロンといふ大きな國に亡ばされ、たくさんの人々が捕虜になつてその國にゆき、七十年のあひだバビロンやベルシヤの國に暮したことがございます。

その頃のこと、バビロンはベルシヤのために亡ばされ、ユダヤから往つた捕虜の人々もベルシヤの王さまに治められました。が、わけてもベルシヤのクロスといふ王さまは、たいそう情深いお方で、ユダヤ人をお國へ歸してやらうと思ひ、そのことを仰せになりますと、ユダヤ人たちは大そうよろこび、いろいろの荷物をかゝえて五萬人ばかり、ベルシヤを去りました。

ところが、ペルシャに残つてゐるユダヤ人のうちにエズラといふ人がありました、この人は神さまのみをしへの書いてある古い御本にくはしい學者で、世界のはじめのことから、ユダヤの國の起源やいろ／＼の歴史やらを、よく知つてをりました。そして、それらの書物をしらべて、正しいのと正しくないのをよりわけ、正しいみをしへの書いてある物を集めて、羊の皮の巻物に書き寫しました。——これが舊約聖書の土臺なのです。

エズラは斯うした大事な仕事をしてゐましたが、自分も御先祖のお國ユダヤに往きたいと考へました。なせなれば、其頃はまだ私たちの持つてゐるやうな聖書のない時でしたから、神さまのみをしへをたやすく讀むことができませんでした。

そこで、エズラは、ユダヤに歸つた人々に、神さまのみをしへを聽かせたい、さうでなければ、みんなが神さまにそむいてしまふかも知らない、もしそくなつたら大變だと心配し、時の王さまアルタスタ王に願ひいたしますと、幸にも王さまは

「おゝ宜しい、往くがよからう。入用なものは何でも遠慮なく言ふがいい。またお前と一しよに歸りたい者があるなら、誰でも一しよに往くがいい。」と仰せになりました。

そのことを聞きつたへたユダヤ人たちは、「先生、私も歸りたうございますから、おつれ下さい。私もどうぞ……。」と言つて、みんなで千人あまり集まりました。

ペルシャの王さまをはじめ、立派なお役人たちは、親切にもたくさんのお金や銀をみんなに下さいました。何しろ途中ながい旅をしなければなりませんからお金がいりますし、ユダヤへ着いても生計をたてるのにお金がいりますから、斯うした親切が、どれだけみんなのためになつたか知れません。

「エホバの神さまは、王さまやお役人たちの心を動かして、私たちをお國へ歸すやうにして下さつた、なんと有難いことでせう。さあ、王さまや、みなさんによくお禮

を申上げて出かけませう。」

エズラは、みんなを伴れてペルシヤの都をでかけましたが、國ざかひのアハツといふところを流れる川のそばまで参りますと、みんなに向ひ、「これから、いよく淋しい野原や山をゆかなければなりません、途中に砂漠もありますし、盗人のひそんでゐる場處もあるけれども、私は王さまから兵隊をお借りしなかつた。なせといふに、私たちの神さまは強いお方で、兵隊にまもられるよりもつと大丈夫だと思つたのですさうですから、これからの旅行のために、神さまのみめぐみを祈りませう。神さまは熱心に祈るものにお答へ下さるお方です。」

と言ひました。

さいしよ、ペルシヤの王さまはエズラに、「お前たちは、大事なものを持つて、淋しいところをゆくのだから、歩兵や騎兵をつけてあげようか。」

と仰しやつたのですが、エズラは、

「仰せは有難う存じますが、私たちの神エホバは、天地の造主いける神さまですからかならずや安全におまもりくださいます。」

と、お断りしたのでした。

みんなは、三日のあひだ、川のはとりに泊つてお祈りをいたしました。その時、神さまは、「よろしい、たしかにお前たちを護つてあげる、心配しないで往くが好い。」と仰せになりました。

みんなは、もう大丈夫だ、神様のお約束にまちがひはない、たしかに安全にお護りくださるにさうゐない……と、よろこび勇んでそこをたちました。なるほど途中に、恐ろしい敵もをりました、また怖い猛獣もゐましたが、ふしぎに其のわざはひを免れました。そして四ヶ月たつてユダヤの都エルサレムに着きました。

みんなの持つてきた澤山の金や銀も、神さまのために用ふる貴いお道具も、残らず無事でした。ユダヤの人々は、みんなを見て非常によろこびました。みんなは、エル

サレムで、神さまのみめぐみを感謝するために、賑かなお祝ひを催し、羊や牛を祭壇にそなへてお禮を申上げました。

第二十九課　ダビデの感謝

〔祈禱によりて神と語る・二〕

▼本課の目的

父なる神は我等の捧ぐる感謝の祈りをよろこび給ふことを教ふ。

▼資料

(A) 直接資料……サムエル後書七章。

(B) 参考資料「勇者ダビデ」(小林清三郎氏譯)

▼金　　言

われエホバを愛しむ、そはわが聲とわが願望とをききたまへばなり(詩篇百十六篇一)

▼教話の準備

私たちは嬉しいことも悲しいことも、お父さまやお母さまにお話しいたします。—
お友だちや先生にはめられたことも、また苛めつ兒に意地わるされたこともおはなし
するでせう。さうするとお父さまやお母さまが、
「それは、よかつたねえ。」

と、仰しやつてお喜び下さつたり、

「そいつは困つたものだ……。」

と、心配して下さつたりいたします。また私たちは、お父さまにおみやげをいただい

たり、お母さまに何か買つていただく時、「お父さま、有難うございました、私ちやうど欲しいと思つて居りました。」

「お母さま、私嬉しくつて嬉しくつてたまらないの、ほんとに有難うございました。」と申上げるなら、お父さまやお母さまも、「あゝ、さう……？」つて、およろこびになるでせう。そのやうに、私たちは嬉しいこと、有難く思ふことを、神さまに申上げなければなりません。今日のおはなしは其のことに就いてです。

▼教 話

むかしダビデといふ王さまがありました、ユダヤの國の第二ばん目の王さまでしたが、この人ほど偉い王さまはございませんでした。さうですから、後々までも、その王さまを敬まつて、自分の家に生れた子供にダビデといふ名をつけるやうになりました、それがユダヤだけでなく世界ちうにひろまつて、今でも英語で「デイヴキッド」と

いふ名がたくさんありますが、それが「ダビデ」と同じ名前なのです。

ダビデ王は、そのはじめベツレヘムといふ村の羊飼ひエサイといふ人の八番目の息子でした。自分も小さい時から羊飼ひをいたしました。ところが或る日のこと、サムエルといふ偉い先生が、エサイのお家へおいでになりました、エサイは、

「先生、ようこそおいで下さいました。」

と迎へますと、エサイに、

「神さまは、あなたの息子さんのうちから、王さまになる人をお選びになります。」と言つて、八人の息子を見ましたが、八人目のダビデがそのしるしの膏をそそがれました。けれどもダビデが王さまになるまでに、ずるぶんいろいろのことがありました。羊飼ひをしてゐる時、獅子に噛まれようとしたり、熊に殺されようとしたり、ベリシテの大將ゴリヤテと戦争したり、王さまに憎まれて野原や山にかくれてなんぎをしたり、また王さまの死んだ後も、敵の來るのを防いだり、國の中の謀反を平げたりそ

れは／＼危いことが時々あつたのです。

しかし、そのたんび、神さまにお祈りして助けていただきました。

そして、いよく立派に國を平げて、都をエルサレムに移し、美しい御殿に、偉い王さまとして住つた時、ダビデはこれまでのいろ／＼のことを考へました。――あの危い時、あの困つた時、あのなんぎをした時、――もし神さまのお助けがなかつたら、自分はどんなになつてしまつたでせう。あゝ有難いことだ、神さまはふしぎな助け、思ひがけない力をお興へ下さつたので、こんなに幸福にしていたのだ。

それなのに、私はこれぞと思ふお禮も申上げてゐない、なんといふ勿體ないことだ。せひ、神さまのために何かいいことをしなければならぬと考へました。

そして、ふと思ひついたのは、

「さうだ、私はこんなに立派な御殿に住んでゐる、それなのに、神さまを拜む場所はまことに見すばらしい粗末な天幕だ、これは濟まないことだ。どれ、私は神さまのた

めにイスラエルで一番立派な建物をこしらへませう……。」
といふのです。

そこで、ダビデはそのことをナタンといふ先生に相談いたしました、ナタンは、

「王さま。いいことをお考へになりました、私は大賛成です。神さまもきつとおよろこび下さるでせう。」

と申しました。それでダビデは、

「ちや、本當にうれしうございます。私はそのためには金も銀も寶石もみんな献げます、そして神さまをおよろこばせいたしませう。」

と意氣込みました。ところがその喜びも一寸の間で、まもなくナタンがダビデのところへ、やつてきて、

「王さま、私はあれから家に歸りますと、神さまが仰せられました。その心がけは本當によろこばしい、ダビデが私のめぐみを有難く思ふのはよろしい、けれども、神殿

を立てることはお延ばしなさい……といふのです。」
それをきいてダビデは、

「えッ、お延ばしなさいつて？いつまでですか……。」

「はい、あなたの王子が王さまになつた時、その王子におさせなさいといふのです。つまり、あなたはあんまり戦争して、たくさん人の血をながしましたから、王子の代にした方がよろしいとの仰せです。」

ダビデは、がっかりいたしました。氣をとりなほして、

「はい、わかりました、何事にも神さまの仰せ通りにいたしませう。それでは、私はその用意だけをいたします。」

と申しました。ナタンはなほも言葉をついで、「神さまは、まだく仰せられました。あなたの王子が、神殿をたてますが、その代には、この國を今よりも盛んな立派なものにして下さいます、あなたの子供はますます榮えます、神さまはみんなのお父さま

になつて、この國の民を幸ひにして下さいますとお約束なさいました。」

ダビデは、ますますよろこんで、

「私の代に神殿ができないでも、息子の代にできるなら同じこと、それに私の子孫がますます榮えるとは、なんと有難いことでせう。」

と言つて、神さまを拜む天幕——それは幕屋と申しました——に往つてお禮のお祈りをいたしました。

「神さま、私はうれしくつて、うれしくつてたまりません、なんとお禮を申し上げていか言葉もありません、私の後々のことまでも仰せ下さつて有難う御座います。」と申し上げました。

その喜ぶ心、お禮を申し上げる心を、神さまは非常におよろこび下さつて、ダビデをいよく幸福にして下さいました。

第三十課 神殿の建築

〔神を禮拜すること・1〕

▼本課の目的

禮拜は靈と眞とを以てなすべきものなれど、同時に外形に於ても出来る限りの善美をつくすべきことを學ぶにあり。

▼資料

(A) 直接資料……歴代志略上廿九章、同下二章——五章。

(B) 參考資料……舊約物語、聖書物語。

▼金言

いとたかき者よ、エホバに感謝し、聖名をほめたたふるは善かな。(詩篇九十二篇一)

▼教話

ダビデ王は、いつも神さまのみめぐみを喜んで日を送りました。何しろ神さまが、次ぎから次ぎと、幸ひな事をお與へ下さるので、ただ／＼感謝とよろこびに溢れるのほかありませんでした。

そこでダビデは、どうかして神さまのみめぐみに報いたい、何かして御恩返しをしたいものだと思ひましたが、天地をお造りあそばしたお偉い神さまに、小さい人間がどんなことをしたとて、十分の御恩返しのできるものではございません。しかし神さまは、その美しい心がけを非常におよろこび下さいました。

そしてダビデが、お禮のために考へたのは立派な神殿、けれども神さまは王子の代になつてからにせよと仰せられましたから、残念とは思ひましたが、それでも結構だ出来るつたけの用意をいたませう、王子が位にいたら、すぐ取りかゝれるやうに何もかもちゃんと揃へませうと考へて、自分の持つてゐる金や銀や寶物等ありつたけの物を、神さまに献げました。また國の中から一ばん立派な大理石をよりだしてたくはへ、見事な材木を伐らしてしまつておきました。そのほか、いろいろの飾物のためには寶石はもちろんのこと黒い石、青い石、みかげ石などを澤山あつめて庫におさめました。

(28)

それから、ダビデは神殿の形や、間取りや、廊下や庭の寸法や形に、心をもちひ、あれやこれやと工夫をこらしました。そして王子のソロモンに、其の建て方について教へました。また家來たちを集めて、

「ソロモンは、まだ年が若くて、こんな大きな工事は六つかしいのだから、みんなが力をあはせて出来るやうにして下さい。この神殿はこの上もない美しい立派なものになつて、神さまをおよろこばせするものになりたい、私はこれがために、ありつたけの物をささげたが、ちつとも惜しく思はない。」

と申しますと、家來たちも、
「私たちも、出来るだけの力をつくします、また出来るつたけの物をよろこんで献げませう。」

と言つて、いろいろの物を持つてまわりました。その後、いよいよソロモンが王さまの位につきました。そして第一に神殿をたてはじめました。まづ北の國の王ヒラムといふ人に使者をやり、

「私は、お父さんの志をついで、神殿をたてることになりましたから、どうぞ手傳つて下さい、何しろすばらしい大きな工事です。またこれにはいろいろの材料がたくさんいります、またすぐれた細工人もいります。それから、あなたのお國のレバノン山

(29)

にある香柏や松や白檀の材料もいりますから、それらの物を送つて下さい。」
と言はせました。ヒラム王はそれをきいて、「それはまことに喜ばしいことで御座いま
す、神さまはダビデ王の世嗣にすぐれた王子をお與へ下さつて、神殿をおたてさせな
さるとは、なんと嬉しいこととせう。よろしうございます、何でもお手傳いたしませ
う、私はダビデ王のお世話をうけたものですから、どんな御用でもいたします。」
と言つて、すぐれた細工人やレバノンの材木をどしどし伐りだし、それを筏にして海
からユダヤへ送りました。

ソロモンは、荷物をはこぶために七萬人、仕事をするために八萬人をえらび、それ
らの人々を取締るために三千六百人の役人を定めて、神殿の工事をはじめました。も
ちろん此のほかにもいろいろの人たちが働いたこととせうが、何しろ十五萬人もの人
々が働いてのことですから、どんなに大きな工事だつたかわかりません。

そして、大工、左官、石工、土工、彫刻師、鍛冶工、織手など各々一生けんめいに

働いて、七年の間かかりましたが、實に立派な物ができ上りました。そこでソロモン
王は、國中の重だちたる人々をあつめて、その建物を神さまに献げるお祭りをいたし
ました。

まづ、これまでの幕屋から神さまの「契約の櫃」やいろいろの貴いお道具を持ちだし
て新しい神殿へと移し、祭壇の上に、羊や牛をたくさん献げて、神さまを拜みました
それから百二十人の祭司や神さまの御用をする役人——や唱歌隊の人々は、いろい
ろの樂器に合はせて、神さまのみめぐみをほめた、へる歌をうたひました。

その時、天から雲がおりて神殿のお部屋に充ちました、神さまがその建物をお受取
り下さつたしるしでありました。神殿は高くそびえて、朝日に輝き、夕日に映え、白
くまた金色に光りました、そしてまことに神々しいものでした。

私たちの教會を美しくいたしませう、きれいにお掃除いたしませう、腰掛もちやん
と列べませうきれいなお花も飾りませう。

第三十一課 河畔の禮拜

〔神を禮拜すること・二〕

▼本課の目的

我等は到るところにて神を禮拜し得ること、また野外禮拜の興味を學ばしむ。

▼資料

(A) 直接資料……使徒行傳十六章九—十五

(B) 參考資料……聖書物語文庫、聖書物語。

▼金言

父は斯の如く拜する者を求めたまふ。(約翰傳四章廿三)

▼教話の準備

ダビデ王やソロモン王によつて建てられた神殿は、まことに立派な禮拜所でしたから、定めし身も心もおちついて好い氣持のするところだつたに相違ありません。また此上もなく美しい氣高い建物でしたから、ユダヤの人々は非常にそれを誇りまして、しまひには、エルサレムの神殿のほかに、神さまを拜む場處はないほどに考へました。けれども、神さまはどこにもおいでなさいますから、どこにゐても拜むことができます。立派な神殿や綺麗な會堂だけが禮拜所ではありません。

(33)

▼教話

今日お話しいたしますのは野外の禮拜處です、それはピリピといふところの河の畔

(32)

にありました。椅子やお蒲團のかはりに柔い緑の草がはえてをり、天床もありましたが、それは美しい雲の浮いてゐる青天床でした。柱といふのは自然にはえた大木の幹で、暑い日には黒い樹影をつくつてくれました。

人々がお祈りしてゐる時、はたで平氣で歌ひつづけてゐる唱歌隊はと見れば、それは小枝にとまつてゐる小鳥の群でした。またそこには彩色のしたスタンド硝子の窓がありませんけれども、堤や丘に咲きみだれてゐる花がありました。

その昔、ピリピの町は大方、木や石で作つた偽の神々を拜む人々ばかりでしたが、ごくわづかの人たちは、眼に見えないまことの神さまを信じてをりました。そして此の人たちは、神さまを拜む神殿とでもありませんから、安息日——今日の日曜日のような日——には、町のちかくの河にきて、その畔の青草の上に座つて禮拜をするのでした。禮拜といふのはお祈りをしたり、さんびかを歌つたりしながら、神さまを拜むことです。

ある安息日のこと、いつもやうに人々があつまつて居りますと、そこへ見なれぬ三人の人がやつてまゐりました。集りの人々は

「はて、どこの人たちでせう、私たちの集會に來たこともないのだが……。」
と思つてゐるうちに、三人のうち一人が、

「私はユダヤ人のパウロと申す者でございますが、先日ふしぎな幻のうちに、神さまのお知らせを受け、こちらのマケドニヤの國へわたつてまゐつたのです。」

その幻といふのは、夢のうちに一人のマケドニヤ人が現はれて、どうぞマケドニヤに來てイエスさまのみをしへを傳へて下さいといふのでした、そこで私たちは海をこえて、こちらへやつてまゐりました。この國の人々はまだイエスさまのことは知らないのです、皆さんにも是非そのおはなしを致したく思ひます。私たちのうちこの人はシラスと申しますし、こちらの若い方はテモテといふものです。」

と申しますと、集會の人々は、

「まあ、さうでしたか、どうぞイエスさまのことをお知らせ下さい、そのお方はどんなお方ですか。」

と言ひました。そこでパウロは、

「あなた方の信じてゐらつしやる天の神さまは、私たちが可愛がつてくださいますから、罪から救つて限りない生命をお與へ下さるために、御獨子の主イエスをユダヤの國にお降しになり、私たちのために十字架におかけなされたのです。このお方を救主と信する人は罪を赦されるのです……。」

と、お話しいたしました。人々はよろこんで聴きました。

ところが、そのところにルヂヤといふ反物を商ふ女主人がりましたが、わけでもパウロの言ふことを熱心に聴き、

「なるほど、天の神さまはそのやうなみめぐみをお垂れ下さつたのですが、私たちは知らずに居りました。」

と心をひらいて主イエスさまを信仰し、自分のお家の人々にも信じさせ、その上パウロたちをお家へつれて来て、大層しんせつに泊めてくれました。

パウロたちは、その家に泊つてゐて、ビリビの町に傳道し、イエスさまのみをしへをひろめてゆきました。

河畔の禮拜は斯うして澤山の人々に幸福を與へるところになりました。神さまのお造りあそばした四季をりくくの美しさに包まれる自然こそは、神さまを拜むのに、まことによろしい場所ではありませんか。

第三十二課 復習學課

〔神を禮拜すること、三〕

▼本課の目的

祈禱によりて神の恵を蒙り、感謝によつて愛情を増し、禮拜によりて神をおよろこ

ばせすることを學ばしむ。

▼資料

(A) 直接資料……第二十八課より第三十一課。

(B) 参考資料……約翰傳四章、路加傳十九章廿八以下。

▼金言

神は靈なれば拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり。(約翰傳四章廿四)

▼教話

私たちの信ずる神さまは、世界をお造りあそばした方ですから、どこにでもおいでになります、眼に見えないお方ですが、どんなこともごらんになり、どんなことでも御存じでいらつしやいますから、私たちがどこでお祈りしてもおわかりになるのです。

エズラといふ人は、お國から離れた遠いペルシャでお祈りしたのですが、神さまはちやんとお聞き下さいました。またお國へ歸る途中の淋しい野原や山でお祈りしましたが、それも聴いていただきました。

またダビデといふ王さまは、御自分の御殿でお祈りをしたり、琴をひいて感謝の歌をうたひました。また若い時は野原で羊飼ひをしながらお祈りいたしました。

けれども、ダビデは神さまを拜むために立派な神殿カッパをたてようと思ひました。金や銀や寶石をありつたけだして、とても立派なものを建てようとしたのです。神さまは野にも山にもおいでなさるのに、わざわざそんなにお金をかけて神殿カッパをたてる必要があるでせうか、つまらないぢやないでせうか。

いいえ、それもつまらなくはないのです。美しい氣持の好い、静かな建物の中でお祈りすることも大切なのです。私たちは、いつでも野原や山に出かけることができないうでせう、それには、あたりのさわがしいこと、ごた／＼したことを忘れさせる落着

いた建物——それが今の會堂——のあることは、まことに結構なことです。

ダビデの王子のソロモンといふ人が王さまになつた時、いよ／＼立派な神殿を建てました、それは非常にすぐれたものでした、それが初まりで、それからといふもの何百年とつづきました、そしてイエスさまが此の世にお降りになりましたが、十二の時わざ／＼ナザレといふところから、エルサレムの都へ出て、宮殿へおいでになりました。それからあとも幾度となく、そこへおいでになりました。その神殿でお祈りをなさることが、どんなにお嬉しかつたかわかりません。

けれども、イエスさまは、せひ宮殿へ來なければ神さまを拜むことができないとかお祈りが出來ないやうに思つてゐる人々に、決してそんなことはない、どこでお祈りしてもよろしいとお教へなさいました。

それは、サマリヤのスカルといふところの井戸のそばで、イエスさまがサマリヤの女におはなしをなさつた時でした。女は、

「先生、私たちの先祖はこの國の山で神さまを拜みましたのに、ユダヤの國の人々はエルサレムでなければいけないと申しますが、どちらがよろしいので御座いませうか」
イエスさまは、それにお答へあそばして

「さやう、私のいふことをお信じなさい、それはエルサレムだけでもなく、この山だけでもなく、どこでも、拜むことができるのだ。神さまは私たちの心みたいに眼に見えないお方だから、拜む私たちも心でおがむのが大切だ、形でなくまごころで拜まなければなりません。」
と、お教へになりました。

また、或る時イエスさまは東の方の町や村を教へて、エルサレムへお歸りになる時途中から驢馬の仔にのつておいでになりました。さうすると近所の人々は、

「イエスさまが、お歸りになるからお迎ひにゆかう。病人をなはしたり、死んだ人を活かしたり、いろ／＼のふしぎな事をなさつたといふことだ……。」

と言つて、路に澤山の人々が出てまゐりました、その賑かなことつてありませんでした。

そして、大人も子供も、「主の名によりて来る者は福なり、いとたかきところにホザナよ。」と歌ひました。「ホザナ」といへば「主よ我を救ひたまへ」と言ふことばでイエスさまを崇め敬つた言葉です。それから棕櫚の葉を振つたり、自分たちの着物を路に布いたりして、イエスさまを貴び、またく繰返して、

「いとたかきところにホザナよ。」と叫びました。イエスさまは、その人々の叫んだことを非常におよろこびなさいました、わけても子供たちの叫んだことについて、
「神さまは、乳哺兒ちのちごや嬰兒あなごの口にまで讚美をおさづけ下さつた。」と仰せられました。神さまは、どこで拜んでも、どこでお祈りしても、まごころからすることをおよろこび下さるのです。

私たちも、日曜学校だけでなく、お家でも、それから学校にゐる時でも、お祈りいたしませう。

第三十三課

ヨセフの災難

〔神の喜び給ふ行爲・一〕

▼本課の目的

他人から不親切をされても、それを恨まずに静に忍ぶことが、神のおよろこびになる行爲なることを教ふ。

▼資料

(A) 直接資料……創世記卅七章五―十一、十八―三十六。

(B) 参考資料……ヨセフ物語。罪おとしあなより。

▼金言

われら互に相愛すべし。(ヨハネ一書三章十二)

▼教話の準備

他人を苛めたり意地悪るをしたりすることは、その人にどんな悲しい辛い思ひをさすことかわかりません。神さまは決してそのやうなことをお喜びになりません。責められても苛められても、静かにがまんしてることが、神さまのおよろこびになることであり、また他の人をも幸ひにするものです。

(44)

▲教話

むかしヨセフといふ人がありました。この人に十人の兄さんがありましたが、そろ

ひも揃つて意地の悪い人たちでした。

兄さんたちは、羊飼ひでしたから、毎日たくさん羊をつれては、野原へ出かけましたが、ヨセフは一ばん下の弟ベニヤミンと一しよに、お父さんの手許にゐて、お世さんの亡くなつたあとの淋しい老年のお父さんを大事にしてをりました。

お父さんも、ヨセフを殊のほか可愛がりました、そして誰よりも美しい着物をきせました。ヨセフもまた誰よりも立派で、誰よりも伶俐でした。それからヨセフは時々ふしぎな夢を見るのでした。

「お父さま、おもしろい夢をみました。」

「どんなのだつた？」

「それはねえ、麥刈のところ、私たち兄弟十二人が畑に出て麥を刈り、それで麥束をこさへてをりますと、どうしたのか、私の束が立ちあがりました。するとみんなの束がそばへよつてきて、私のを拜みました。」

(45)

また、ある時の夢は、

「大きな太陽と月と、それから十一の星が列んで、私のまはりに寄つてきて、恭々しくお辭儀をいたしました。」

と、ヨセフが無邪氣におはなしをいたしますと、日ごろ意地の悪い兄さんたちは、

「なあんだ、忌々しい、なまいきな、弟のくせに私たちを馬鹿にしてゐる……。十一の星といふのも、十一の束といふのも私たちのことをいふのだ。お前は私たちの長かみにならうといふのか、誰がお前にへえ／＼するものか。」

と言つて、ます／＼ヨセフを憎がりました。けれどもヨセフは、いつでもすなほで、やさしく兄さんたちに仕へ、また小さい弟をかはいがつてやりました。

それでも兄さんたちは、ヨセフがとくべつお父さんに可愛がられることや、自分たちよりも賢いことなどを考へ、もしかすると、その夢のやうに自分たちを治めるやうになるかも知れない、そして仇返しをするかも知れない、何しろ憎い奴だ、いつかひ

どい目に遭はしてやらうと思ひました。

さて或る日のこと、兄さんたちは羊をつれてシケムといふ野原へいきましたが、幾日もお家へ歸りませんでした。そこでお父さんは、ヨセフにおみやげを持たせて、兄さんたちのところへやりました。

ヨセフは、それを持ってシケムへゆきましたが、どうしたものか兄さんたちがあませんでした。だん／＼きいてみると、そこからドタンの方へいつたとのこと、そこでヨセフは、わざ／＼ドタンまで兄さんたちの後をおひました。

ところが、ドタンで羊の番をしながら、憩やすみんでゐた兄さんたちは、

「おや誰か来たやうだ……。」

と言ひながら、誰だらう、彼だらう、と見つめました。が、やつとのこと、

「お、ヨセフだ、あの夢見る者のヨセフだ。」

と見とどけました。さうすると、みんなは、これまで考へてゐた——ヨセフを懲らし

める——のに丁度いい時だと語り合ひながら、ヨセフの近よるのを待ち受けました。ヨセフは、そんな恐ろしい相談のあらうとは少しも知りませんから、疲れたことも忘れてよつて来て、

「お兄さま、お兄さまア……。」

けれども、みんなはむつりした顔して返事もいたしません、變だと思ふまもなく、みんなはヨセフの手足を引きとらへ、着物をはがしにかゝりますから、ヨセフはおどろいて、

「これ、お兄さま、どうするんです。これ、お兄さま。」と叫びだしますと。

「まあ、黙つてゐろ、あとでわかるから。」

と、罵りながら、着物をぬがせて、古井戸のなかへと投げ入れました、井戸は深かつたが、水はありませんでした。

みんなは、そのままヨセフの持つてきた、おみやげをひらいて食べました。

「おう、美味しいなあ。」

「ほんとに、美味しい、あいつは毎日家にて、こんなのを食べてゐただらう。」

その時、はるか彼方カクから駱駝にのつた一隊の商人がまゐりました。すると一人が、

「さうだ、あれはエジプトへあきないにゆく隊商だ。ヨセフをあれに賣つたらどうだ。」

「さう、さう、それが好い、古井戸に入れて殺したつて一錢にもなりやしない。」

「ヨセフを奴隷に賣れば幾何にかなる……。」

「さうだ、それが好い。おほいそぎで引きあげろ。」

と、急いでヨセフを繩でひきあげました。ヨセフは、もう赦されることと思ひましたら、さうではなく、こんどは隊商に賣られようといふのです、

「お兄さま、そんなことをしないでください。どうぞお家へ歸へしてください。」

「まあ、だまつておいで、命を助けてもらへるんだから有難いと思ふのだ、これじた

ばたするな。」

やがて、隊商が近よりました。兄さんの一人が、

「もしく、一寸この子を買ってもらひたいんですが。」

「ほお、可愛らしい少年だ。」

「ええ、頗る上等ですから、うんと高く買つて下さいな。」

「うんと高くといつても、少年ぢやたんと働けないんだから、たくさんは出せません
まあ、二十枚だ……。」

「二十枚？」

「それより餘計は出ません。」

兄さんたちは、みんなで相談し、二十枚でもよろしいといふことになり、隊商から
銀二十枚うけとつて、ヨセフをやりました。

「まあ、これで厄介物もかたづいた、が、お父さんには何んと言つたものだらう。お

父さんにきかれて、ただ知りませんと言へば、探しにゆけと言はれて難儀しなければ
ならぬ。」

「さうだ。さうく、これ、こゝにヨセフの着物がある、これをすたく／＼ひき裂いて
羊の血をぬつて、途中にこれが落ちてをりましたと言ひや、お父さんは狼にやられ
たとお思ひになるだらう。」

「それが好い、それが好い……。」

と、さつそくそのやうにしてお家へもどりました。お父さんは

「おゝ今歸つたか、そしてお前たちヨセフに會つたかい。」

「いいえ……。」

「會はない？それや困つたな、みやげを持つて、お前たちを見に往つたがな。」

「はあ、私たちはシケムからこんどはずつと遠いドタンへとゆきました、それから歸
り路にこれを拾ひました、どうやらヨセフの着物みたいだと心配してきましたが。」

お父さんは、それを見て

「なに？、それやヨセフの着て出た着物だ、あッ、血が、血がついてゐる……」

「こんなに裂けて血がついてゐましたから、もしや途中狼にでもやられやしないですか、可憐さうに……。」

「あゝ、ヨセフ、ヨセフ、私の可愛いヨセフが……、ヨセフが死んぢやつた、ヨセフ！ヨセフが死んぢやつた……」

と、お父さんは聲をあげて泣きました。すると、末子のベニヤミンも、

「お兄さまが死んぢやつた……。」

と、これも泣く、なんとも氣の毒でありました。けれども兄さんたちは、謀のうまくいつたのを心で喜びました。

これからといふもの、お父さんのヤコブは急にがっかりしてしまひました、明け暮れヨセフを思ひだして悲しみました。

それから、なつかしいお父さんや可愛い弟のゐるお家を離れて、遠い見知らぬ國へ賣られてゆくヨセフは、どんなにか淋しかつたでせう。小さい時お母さんに死なれましたが、こんどはお父さんに二度と再び會へなくなるのですから、振返り／＼泣きました。

けれどもヨセフは、悲しむお父さんのためまた、可愛い弟のため、それから無慈悲な兄さんたちが正しい人になるやうにお祈りしながら、だん／＼お國を離れてゆきました。

第三十四課 感謝の歌

〔感謝日學課〕

▼本課の目的

本學課は感謝日の特別學課で、天の父のお與へ下さる多くの恩恵について感謝すべきことを教ふ。

▼資料

- (A) 直接資料……出埃及記十五章一、二、廿、廿一
(B) 参考資料……詩篇五十篇廿三。ビルグナム祖先物語。

▼金言

エホバわれらのために大なることをなしたまひたれば我等はたのしめり。

(詩篇百二十六篇)

▼教話の準備

むかしイギリスから、まだ開けてゐないアメリカへ渡つてきた人々が、畑を作つて穀物を蒔きましたが、秋になつて實るのが待遠くありました。何しろ持つてきた食物はだん／＼減つていきますから、もしも秋に穀物がよく出来なかつたら、餓死するはかりません、みんなはどんなに心配しながら秋になるのを待つたことせう。

ところが、幸ひにも秋のとりいれは宜しうございました。そこでみんなが歡んで、にぎやかなお祝ひをして神さまに感謝いたしました。これが感謝日のはじまりで、アブラハム・リンカーンが大統領になつてから、毎年秋の十一月第四の木曜日を「感謝日」といふことに決めました。

今日の日曜日は、その日の頃になつてゐますから、感謝のことを學びませう。

▼教話

「感謝」といふのは有難いと思ふことです。お禮をいふ心です。私たちは神さまのみ

めぐみ、お父さまやお母さまのなさけ、國家の御恩をうけてをります。それを心から有難いと思はなければなりません。

今は秋です、ごらんさい、穀物がみのり果物は熟しました。どなたが斯んなにして下さつたのでせう。神さまが一年のあひだ、日をしてらし雨をふらせ、暑くしたり、寒くしたりして下さつたからです。そしてお百姓さんが一生けんめいにはたらいたのに、おむくひ下さつたのです。

もし、日がてらず、雨も降らなかつたら、お百姓さんがどんなに、はたらいでも無駄なことです。さうですから、神さまに感謝しなければなりません。

日本には、十一月の末に「新嘗祭」といつて、新しくとれた穀物を、御先祖にささげたり、天皇陛下に奉つたりする日がございますが、それと同じころアメリカでは「感謝日」といつて、天の神さまのめぐみに對して、お禮を申上げる日がございます。——めぐみを喜ぶこと、それを有難く思ふことは、神さまのおよろこびになること

でございます。

むかし、イスラエルの人々が、あの道のない紅海を、ふしぎにも歩いて越えた時、しかも後から追かけた敵がその途中まで來てほろぼされた時、獅子の口からのがれた小兎のやうに助かつた時、どんなに嬉しかつたこととせう。——そのお話は第八課にあります。

みんなが、紅海の彼岸アラビヤの國の岸に立つて、神さまにお禮を申上げながら、よろこび歌ひました。その歌は、

我エホバを歌ひほめん

彼は高らかに高くいますなり

彼は馬とその乗者を海になげうちたまへり

わが力わが歌はエホバなり

われこれをたゝへん

彼はわが父の神なり、我これをあがめん

エホバは軍人にして其名はエホバなり

彼バロの戦車とその軍勢を

海に投げすてたまふ(以下略)

といふので、それをやさしく言へば

「私たちは、神さまをほめ奉りませう、神さまは誰よりもすぐれたお方です、そしてバロ王の馬や、馬に乗つてゐた人々を海の中にお投げ下さいました、そして私たちを敵の手からお助け下さいました。」

神さまは軍人で、エホバと仰せられる總大将でいらつしやいます、そしてバロの軍勢をのこらす海に投げてお亡しなさいました、なんと有難いことではありませんか……。」

と言ふことなのです。

その時、モーセやアロンの姉さんミリアムは、鼓をとりだしてまわりますと、ほかの婦人たちも鼓をもちだし、ともなくそれを鳴らしながら、またも、

「なんぢらエホバを歌ひほめよ、彼は高らかに高くいますなり、彼は馬とその乗者を海になげうちたまへり。」

と、くり返し／＼歌ひました。どんなに嬉しかつたことせう。

またダビデは、神さまの御恩を感謝する人でした、いつでも感謝の歌をうたつて居りました。この人は先きにおはなししたやうに小さい羊飼ひの少年の時から、いつも神さまに守られて危いところから助けていただき、遂ひには立派な王さまになりましたが、その後も神さまの御力によつて、いろ／＼の禍から助かりました。

さうですから、ダビデは感謝の歌をうたふだけでなく、感謝の献物を神さまに差上げてお禮の心をあらはしました。そして、一ばん心をこめたのは、神さまを拜むために神殿をたてることでした、もちろん建てたのはソロモン王の代でしたが、ダビデは

その用意に一生けんめいだつたのです。

ダビデは、たくさんの兵隊も、お金も、領分も、みんな神さまに戴いたのですから神さまのためなら、何をも献げるつもりでをりました。——私たちもダビデのやうな心、感謝にみちた心をほしく思ひます。

▼教授上の注意

(一)時間がありましたら、イギリスの清教徒の人々が本國からメーフラワー號に乗つて、未開の米大陸に渡つた當時の歴史を、もつと委しく話すのも面白いと思ひます。「ビルグリム祖先物語」などは好い参考書です。

(二)また、一個人が豊作物について、神さまに感謝を捧げたお話をさがして挿話となすもよろしいと思ひます。

第三十五課

ヨセフの親切

〔神の喜び給ふ行爲・二〕

▼本課の目的

不親切なる者に對しても親切を表はすは神の喜び給ふことを教ふ。

▼資料

- (A) 直接資料……創世記四十二章——四十五章十五まで
- (B) 参考資料……ヨセフ物語、賽より。

▼金言

▼教 話

ヨセフがエジプトへゆく隊商に賣られてから廿年ばかり経つた時、その同じ路を十人づれの旅人が驢馬をひいて出かけました。それが別に荷物としては持つてをりませんから商ひゆく人たちとも思へませんが、ただをかしのことに、てんでに大きな空つばの袋を用意して居りました。それでは何かを買ひにゆくのでせう。

この十人は兄弟でした、お家には一ばん末の弟と、年よつた——目もろくに見えない——お父さんが残つてゐます。この十人は誰だつたでせう。

それはヨセフの兄さんたちでした。そして漸くのことエジプトの國について、王さまの都のメンフィスについて、穀物のたくさん入れてあるお蔵のところにもゐりました。ほかにもいろいろちがつた國の人々が袋を持つてきてをりました。

それは、その頃、國々に非常な饑饉があつて、お麥もお野菜もさつぱりとれなかつたのですが、エジプトの國ばかりは、その前につづいた七年の豊作のうちに、穀物をどつさりたくはへおいたので少しも困りませんでしたから、あたりの國々から、かうして穀物を買ひに來たのです。

王さまからお藏をあづかつてゐる大臣は御自分で穀物の指圖をしにまゐりました、何しろ饑饉の時にとつては一ばん大事なものは穀物ですから、ひじやうに面倒な役目だつたのです。その大臣がお馬車にのつてまゐります、お役人をはじめおほせいの人たちは土下座せんばかりに恭々しくおじぎいたしました、十人の兄弟もその威光にうたれて小さくなつておじぎいたしました。

人々は順々に穀物を買ひました、そして十人の順番になつた時、大臣は、お役人に言ひつけて、

「お前たちは、どこの者だ。」

と訊きました。十人は恐れ入つて、

「はい、カナンからまゐりましたへブル人でございます。」

「なに、へブルだ？」

と、うなづいた大臣、しかも總理大臣であるその人が、十五年前奴隷に賣られたヨセフだつたのです。そこでヨセフは今はからずも目の前に十人の兄さんを見たのですから、なつかしくてたまりません。ながいことどうか正しい人になるやうにと祈つてゐたその兄さんに、今かうして會はうとは思はなかつたのです。すぐ自分のことを打明けやうかと思ひましたが、待てよ、兄さんたちが正しい人になつたかどうか試めしてからにさせう、また、まだ改心してゐなかつたら改心させて上げませう、そしてから名乗つても遅くはないと考へなほし、エジプト語で

「お前たちは、なるほどへブル人であるやうだが、少し怪いから取調べるであらう」と、通譯をつけて申しつけましたから、十人は顔を色かへて、

「いいえ、決して怪しい者ではございません……、私たちは十人とも同じ家の兄弟でございます。」

「なかに、十人そろつて兄弟だなんて嘘だらう、きつとこの國の様子をさぐりに來た開者にさうゐない。」

「いいえ、決してそんなものではございません。十人ともほんとの兄弟で……。」

「それでは十人だけの兄弟か。」

「いいえ、まだございます、實は男十二人の兄弟で、ほかに年よつた父親がございいます。」

「父親は丈夫か」

「はい、年よつてはをりますが、丈夫でございます。」

その返事をきいてヨセフは嬉しうございました。

「それから、二人の兄弟はどうしてゐる？」

「はい、一人は一ばんの末子で父と一しよに留守をしてゐます。もう一人はそのすぐ上でございますが、これは二十年前のなくなりました。」

「はてな、ゐなくなつた、それがどこへ往つたのだ。」

「はい、わかりません。」

まさか、奴隷に賣り飛ばしましたとも言へなかつたので困つてしまひました。するとヨセフは「それは、をかしい。兄弟の行方がわからないなんて、何かそこに言はないことがあるだらう、それでは家に一人ゐるといふのも、本當でないかもわからない。もしその末の弟をつれてくるなら、私の疑もはれるだらう。」

「それまで、お前たちのうち一人を預つておく、穀物は賣つてやるから一人を残して歸るがいい。」

「いいえ、お大臣さま、それでは困ります、私どもの父はどんなに心配するかわかりません。」

と言つて十人は互ひに顔を見合はせて、

「どうしませう、こんなことになるのも、私たちがヨセフをひどい目にあはせたから神さまがお罰しなされるためでせう。」

「だから、私があの時ヨセフを井戸から逃がさうとしてゐるうちに、あなた方は隊商に賣つてしまつたんだもの……。」

と、ルベンといふ兄が言ひました。すると他の一人は、

「今さら、そんなこと言つたつて仕方がない、とにかく一人を残して一先づお家へ歸るほかに仕様がないでせう。」

と、泣く泣く一人を残してお家に歸りましたが、お父さんはそのことをきいて大層心配いたしました。そして、

「どうしてベニヤミンをエジプトくんだりまでやられるものか……。」
と言ひましたが、そのうちに又々穀物がなくなつてエジプトへ買ひにゆかなければな

りません、それにはベニヤミンをつれてゆかないと、みんながいよく間者と思はれてひどいめにあふかも知れません。そこで、九人は一生けんめいお父さんに頼んで、私たちが命にかへてもベニヤミンを守りますからと言って、やうやく、十人つれだつてエジプトの國へゆきました。

これを見た總理大臣のヨセフは、お役人に言ひつけて、自分のおやしきへつれてゆきました。十人は、さてはどうなることかと心配してをりますと、やがてヨセフがあらはれて、

「それなるは、一ばん末の弟であるか。」

「はい、さやうで御座います、ベニヤミンと申します。」

「なるほど、それで私のうたがひは晴れたから、先達あづかつた一人も歸してやるし穀物も賣つてやらう。」

「有難うございます。」

と、みんなが言つてゐるうちに、家來が兄弟の一人をつれてくる、十一人は互に無事なのを見て抱きあつて喜ぶ、ヨセフはそれを見てなんとも言へない心持がいたしました、幾度も、もう名乗つて、私も一しよに抱きつかうかしら……と思ひましたが、もうすこしの我慢だと、自分の心をおさへつけました。

そしてヨセフは、十一人に立派な御馳走をだしました、十一人を兄弟の順に順々にすわらせましたから、みんなはびつくりしてをりました。その御馳走はとても立派で位の高い人々へ出すやうなものでしたから、カナンの田舎で羊飼ひをしてゐる十一人は、どうしていいのか夢を見てゐるやうな心地がいたしました。

さて、御馳走がすんで、みんなは穀物を袋に入れて驢馬につけましたが、その時ヨセフは、家來にいひつけてベニヤミンの袋の中へ、御馳走につかつた銀のコップをそらつと一つ入れさせました。

みんなは、それとは知らず、よろこび勇んで其處を立ちました、そして暫くすると

ヨセフは家來にいひつけて、

「これから、十一人を追つかけて、お前たちは、なせ主人の大事のコップを盗んだのだと言ひなさい。」

と申しました。家來はおどろいて、

「でも、旦那さま。こつちがわざと入れてやつてからに、盗んだもないで御座いませう。」

「いいえ、あとでわかる、とにかくさう言つて銀のコップを持つてゐる一ばん小さいのをつれて来るのだ、さあ、はやく……。」

そこで家來は十一人のあとを追ひ、まもなく追ひついて。

「これ、お前たちは何のために、旦那さまの大事なコップを盗んだのだ……。」

と申しますと、みんなは少しも覚えのないことですから、一々袋をといて改めますとおどろくまいことか、ベニヤミンの袋の中にはいつて居りました、家來は、

「さあ、これが盗人だ。さつさと、おいで。」

と、ベニヤミンを引つばりますと、みなぞろ／＼戻りました、どうしてそのままカナンへ歸れませう。

やがて、ヨセフが十一人をならべて、取調べやうといたしますと、一ばん意地悪るだつたユダといふ兄さんは、

「お大臣さま、どうぞ此の子をおゆるし下さいまし、その代り私はどんな苦しい目にもあひます、奴隸にならうと、殺されませうと、いとひはいたしません、この子は父親のところへお歸しく下さいまし。さうでない父親はどんなに悲しむことかわかりません、恐らく悲しみのあまり息がとまつて死んでしまふかも知れません。」

と申しました。ヨセフはこれを見てもうよろしい、兄さんたちが、善心に立ちかへつてゐる、父のため弟のために命をさへ投げだしてゐる。もうそれなら大丈夫、名乗つてもよろしい……と、考へましたから、あたりにゐるエシプトの役人や家來をそこか

らしりぞけて、さてヘブルの言葉で申しますのに、

「これ、お聴きなさい、私は……あなた方の兄弟……ヨセフです、ヨセフです。」

と言ひだしましたが、みんなはあまりの突然になんのことも解りません、するとヨセフは繰返して、

「ええ、お解りになりませんか、私はヨセフです、さ、私を見て下さい。私は二十年前にわかれたヨセフです。」

と言はれて、みんなはやつと気がつきました、そして十人の兄さんは雷に打たれたやうに驚きました。

「あッ、どうしませう、あなたはヨセフ。ど、どうぞ、私たちの罪をゆるして下さい、全く悪うございました。どうぞおゆるしを……。」

「いいえ、私はあなた方を責めるのちやございませぬ、とつくの昔にゆるしてあげてみます。ただ善心に立ちかへつて下さるやうに試したのなのです。私はみなさんに會

へたのが、うれしくて、うれしくて、たまりません。」

と、いひながら、高い所からおりて来てみんなに抱きつき聲をあげて泣きました。

「有難うございます、ゆるして下さいますか、私たちもこれから、心を改めてエホバに仕へ、直だしい道をあゆむ者になりますか……。」

と言つて、うれし涙にむせびました。

第三十六課 少年牧者

「神の喜びたまふ行爲・三」

▼本課の目的

日常生活の正しい行爲を、神がよろこびたまふことを教ふ。

▼資料

(A) 直接資料……サムエル前書十六章十一、十二。十七章十二—十五、并に卅四—卅七。

(B) 参考資料……勇者ダビデ、聖書物語。

▼金言

エホバはわが牧者なり。(詩篇廿三篇一)

▼教話

むかしユダヤのベツレヘムといふところに、エサイといふ大きな羊飼ひがありました。その人に男の子が八人、そして一ばんの季子はダビデといふ大層やさしい賢い子

供で、みんなに可愛がられてをりました。

ダビデは、羊飼ひをするのが大好きで、毎日お家の羊をつれて野原にゆきました。そしてベツレヘムはもちろんのこと、近所の村々でも「エサイの家の羊ほど見事なのがない」と評判されるほど、それは／＼熱心に羊の世話をいたしました。

ダビデは、羊をつれておいしい草のあるところ、きれいな水のながれるところを、探してあるき、いよ／＼新しい野原を見つければ、まづそこを經めぐつて、羊の害になる草を抜いたり、毒蛇のゐさうな穴をふさぎながら、危いところがありはせぬかと調べました。

それから、もしも小羊がころんで足をいためるやうなことがあると、腰にさげた用意の膏を傷口につけてやりました。また疲れて歩けなくなつたのであれば、自分の肩にのせてかついで行くこともありました。

いよ／＼太陽が西に沈みかけますと、ダビデは羊をあつめて、その數をしらべ、自

分がその先頭になつてお家に歸り、またも戸口に立ちながら、檻の中へはいつてゆく羊を一つ一つ数へました。

そして、夜は夜でやつぱり油断をいたしません、雇人と一しよに交り番こに番をして、泥棒がきやしまいか、猛獣がきやしまいかと氣をつけます。

さて或る日のこと、ダビデは着物をズタ／＼切裂いてお家へかへりました。お父さんはその様子を見て、

「まあ、ダビデどうしたんだ、ひどく裂けてるんぢやないか。」

「ええ……。」

「ねえ、どうしたんだね。」

「お父さん、今日はねえ、ひどいことをしたんです、私も一時は心配しましたよ。といふのは、今日はすぬぶん淋しい山の中へ往つたんですの、そして羊の番をしてをりますと、どうでせう、一匹の獅子が現はれたのです。」

「なに、獅子が……、それや大變だつたね、そしてどうしたんだ。」

「私も、これや大變だと思ふまに、獅子が可愛い小羊を一匹口に啣へてしまつたので、下度猫が鼠を啣へたやうなものでした。そこで私は小羊を助けようと獅子を追つかけて、首尾よくそれを取返しますと、獅子は口惜しがって私に飛びかゝつてまゐりました。」

「それや大變だつたねえ、それでどうした？」

「ええ、實に大變でした。そこで何よりもまづ神さまにお祈りしながら、飛びついてきた獅子の頭をつかんで力一杯に殴りつけました、さうすると、ふしぎにも獅子はころりと死にました。全く神さまがお護り下さつたんですねえ。」

これを聞いたお父さんは、ダビデを抱きしめて、

「まあ、よかつた、それは偉かつた、エホバの神さまはが護り下さつたのだ……。」
ダビデは別に偉いことをしたとも思ひませんでした。ところが、その後のこと、又

もや羊にをどりかゝる熊を見出しました、そこでダビデは、神さまのみ力を祈りながら、その熊めがけてとびかゝり、力をこめて打ち込みました。さうするとその熊はころりと斃れてしまひました。

そこで、羊はと見れば一匹も傷つかずに無事でした、けれどもかはいさうに、羊は一とかたまりに塊まつて、がた／＼震えてをりました。

ダビデは、時々羊と一しよに野原に夜をすごすことがありました、それはお家からずつと離れたところへ往つた時、その日のうちにお家へ歸れないためでした。その時家の若い者と一しよに交代しながら番をいたしました。夜がだん／＼ふけて、空の星はます／＼冴える、美しい星は降るやうにひかつて何ともいへぬ清々しさ。

ダビデはそれを仰いで見ながら、

「あゝ美しいなア、こんな大きな綺麗な空をお造りなされた神さまは、私たちをお護り下さるとは、なんと嬉しいことでせう。」

と獨語してみたり、またそれを書きとめて歌にしたりいたしました。ダビデの斯うして作つたのが後に立派な詩になつて、聖書の詩篇といふところに集めてあります、またダビデは、歌ふことが上手でした、それを自分の箏に合はせて喜びました、自分ひとりでよろこぶばかりでなく、その歌や箏の音が野原にひびいてみんなもよろこびました。

このやうに自分の務めを熱心にはげんだダビデの羊は、よく肥りよく殖えました。そして、何處の人々も羨んで褒めました。

ある日のこと、サムエルといふ預言者——神さまの仰せを傳へる貴い先生——が、エサイの家へおいでになりました。エサイはよろこんでこの珍らしいお客さまをお迎へいたしますと、サムエルは、

「あなたのお家の息子たちを見に来たのぢやが、どうぞ私に會はせて下さいな。」と申しました。それは神さまがサムエルに、その國の二代目の王さまになるべき人は

エサイの家の息子だとの仰せを授けたからでした。エサイは、
「はい、おやすいことでございます、ちき呼びあつめます……。」
と言つて、息子たちを呼びあつめました。サムエルは第一ばん目の息子から順々に見
ましたが、神さまが「どの息子がそれだ！」と仰せられませんでしたから、
「はて、此處には一人、二人、三人……みんなで七人ゐるな。あなたの息子はこれだ
けか。ダビデさんといふのは、どのお子だな。」

「はい、それは一ばん末がダビデといふのでございますが、あれはまだ子供ですから
呼びませんでした。羊飼ひが好きでございます、今日も原へいつてしまひまして……」
「あゝ、さうですか、それは不可ない。私はみんなに會ひたいのだ……。」
そこでエサイは急いで、使者を野原へやりました、呼ばれたダビデは何事かと思つ
てお家へかへりますと、サムエルは、
「おゝ、このお子か、ダビデさんといふのは……。お前さんのことは、私もきいてゐ
る、この家の末子か……。」

ところが、神さまは、この末子こそ私がこの國の王にえらんだ者だとおほせられま
したから、サムエルは、

「おゝ、このお子だ、神さまは此の子をおえらびになつて、イスラエルを治めさせな
さるでせう、いづれその時が来る、どれ私はそのしるしの膏をそそぎませう……。」
と言つて、貴い膏をそそいで、お祈りして下さいました。

それでもダビデは、羊飼ひをつづけました、彼はそれが好きでした、また上手でし
た誰にでも親切で、またやさしくて、まこと善き羊飼ひでありました。

第三十七課　ダビデの音楽

〔神の喜びたまふ行爲・四〕

▼本課の目的

神の與へたまへる才能によつて、他人の幸福を計ることの大切なるを教ふ。

▼資料

(A) 直接資料……サムエル前書十六章十四—廿三。

(B) 参考資料……舊約物語、勇者ダビデ、聖書物語。

▼金言

われ乏しきことあらじ。(詩二十三篇ノ二)

▼教話の準備

私たちは誰でも、何かしら、他人にすぐれたところがあるものです、算術ができるとか、字がうまいとか、それとも唱歌がえてたとか、いつたやうに、得意なものがあります、それを鼻にかけてゐるのでは何にもなりません。けれども、その得意なこと、他の人をよろこばせたり、楽しませたりする事は、まことに幸ひなことでございます。

唱歌の上手な人は、他の人を耳から――

繪の上手な人は、他の人を眼から――

お話の上手な人は、自分のまはりの人々を――

文章の上手な人は、遠くの人々を――

慰めたり、よろこばせたりすることが出来ます。神さまは、めい／＼に得意な力をお與へくださつたのは、自慢するためでなく、他の人を幸ひにするためですから、けつして威張つてはいけません。

こんなお話があります、——ある時、盲人が眼あきの人をおぶつて川を渡つて居りました。まあ、なんとしたことせう、盲人の方がおぶさつて眼あきの人が歩いたらよささうなものだ。ところが、いよく川を渡つてしまふと、おぶさつてゐた眼あきは「いざり」だったといふのです。なるほど、盲人は眼は見えないでも足は達者ですしゐざりは足がわるくても眼が見えますから、盲人の眼の役目をして、足の向け方をさしづしたのでした。めい／＼のえてなことで、他人のために盡せばずるぶん便利なことや嬉しいことがあると思ひます。

▼教 話

羊を飼ひながら、自分の思ふことを歌つたり弾いたりしてゐたダビデは、よろこびに輝いて朝をむかへ、口を送り、夜になればその日のみめぐみを感じて、その日を終るのでありました。

そして、このあひだの金言「エホバはわが牧者なり」と、今日の金言「われ乏しきことあらじ」とは、續いたお言葉で、ダビデは羊飼ひのことにたとへて、「神さまは私たちの羊飼ひみたいなお方で、私たちは羊なんだ。そして神さまが大事にして下さるから、私たち羊は困るやうな事はない。」といふ心持を歌つたものでした。

ダビデは、かうした満足した心で、野原の向ふの高い山を仰いだり、美しい夕榮えの空の輝きや、銀のやうに光つてゐる小川のながれや、小鳥のさゝやきや、栗鼠のはむれなどを見たり聞いたりするとき、心の中に美しい思ひが湧いて來るのでした。その美しい思ひを言葉にあらはした歌や箏が、野原にひびくばかりでなく、夜はお家の中から近所の人々の耳につたはりました。

「ほお、ダビデさんが、また新しい歌をうたつてるよ、今夜の箏はかくべつに面白いなあ……。」

と、近所の人々がよろこびました。それが疲れた人たちに、好い憩ひをあたへ、病ん

でゐる人々の心になぐさめをあへましたから、ダビデの音楽は大層評判の高いものになつてベツレヘムぢや、誰知らぬものはありませんでした。

そのころのこと、ユダヤの國の王さまサウル——これはその國の第一ばん目の王さまでしたが、ふしぎな御病氣になりました。——といふのは「悪魔になやまされる」といふので、急に腹が立つて亂暴をしたくなつたり、氣がくしゃく／＼して泣きたくなつたり、人を殺したくなつたり、胸が塞つて息がつまりさうになつたりするのでした。家來たちも、これには手のつくしようもなく、困つてしまひました。そこでみんなが相談をして、

「王さまの御病氣をなほすには、どうしたらいいでせう。何か良いお薬はないでせうか。」

「さやう、この國で一ばん大事なただお一人の王さまのことなれば、どんなに價のたかいお薬でも惜しみはいたしません、けれどもちつとも効果がないのです。」

「さても困つたこと、心配なことだ……。」

と、みんなが首をあつめて心配いたします、そのうち一人は、

「私の考へますのに、王さまの御病氣はお體がわるいといふよりも、むしろ心の御病氣ですから、それにはお薬よりも心をおなぐさめ申す方がよろしいかと思ひます、それには音楽をおきかせ申すがよろしからうと思ひますが……。」

「なるほど、それが好いお考へです。」

「左様／＼、なるほど／＼。」

と、お醫者さまをはじめ、みんなが賛成いたしました、そこで家來の一人が、王さまの前に出て、

「王さま、畏れながら申し上げます。王さまの御病氣につきましては、私ども家來の者一同がまことに心配をいたして居ります次第……。」

「おゝ、それは知つてゐる。それがどうしたといふのだ。」

「はい……。それにつきまして、この國のうちから、すぐれた箏の上手な者をえらびだし、それを王さまのおそばにおいて、時々箏をひかせて、おなぐさめ申したら如何なものでございませう？」と相談したのでございます……。」

「ふむ……。相談した、なるほど、それもよからう、箏の上手な者をつれておいで。」

「はッ、おゆるしくだいまして有難うございます。」

「家來はひきさがつて、これを皆にはなしますと、みんなも大よろこび、もしやこれで王さまの御病氣がすこしでもよくおなほり遊ばしたらと思つたのです。」

「それでは、誰がよからう。」

「さう、誰が？」

と、すぐれた音楽者の名をあげて相談しましたが、

「いえ、それよりも上手なのはベツレヘムのエサイの息子のダビデといふ者がすぐれてをりませう。別に音楽が職業といふのではありません、實は羊飼ひをしてゐるん

ですが、その子の音楽といつたら實にすてきなものでございます。」

「へえ……。そんなのがありますか。」

「ええ、ありますとも、私もその噂をきいてゐます。」

「さう、私もこないだききました。」

と、とうとうダビデといふことにきまりました。そこで或る日のこと、王さまの家來がエサイの家にゆきました、エサイは、

「これはくおいでなさいまし。王さまの御病氣は如何でいらせられますか。」

「はい、およろしくないのです、まことに心配なことであります。就きまして私たちの相談は、王さまをおなぐさめ申すために、箏の上手な者といふことになり、こちらのダビデさんを借りたいと思ふのだ。羊の方の世話はどうか都合して……。」

「はい、王さまのためならば、なにをおいても都合をいたします、必らずダビデを差上げることにいたしませう。」

と約束ができました。そしてお父さんのエサイは、いろいろのお土産を持たせ、

「では、いつておいで、王さまのために一生けんめいお仕へ申すのだよ、そのおみやげは粗末なものでございますが、田舎のことですから……つて、王さまに献上するのだ……。」

そしてダビデは、王さまの御所にあがつて箏をひきました、その箏はほんたうに上手なものでした、ダビデはもちろん、

「どうか、もつと上手にひいて、王さまのお心をしづめることが出来ますやうにして下さい。」

と、神さまにお祈りいたしました。王さまは、

「お、ダビデ、美事であるぞ。私の気分もよくなった。」

たとひ、どんなに心苦しくせつなくなつた時でも、ダビデの音楽をさくたんびに、王さまの心がなほつて来るのでありました。そして家來に、

「お前たちは、まことに好い少年を見つけてくれた、あれを私の側仕の者にするであらう。」

と申されました。家來たちも大よろこび、早速ベツレヘムへも使者をやつて、エサイにそのことを申しつたへました。それからといふもの、野原にひびいてゐたダビデの箏の音が、王さまの御所になりひびくことになりました。

第三十八課 クリスマス學課

〔神の最善の賜物・一〕

▼本課の目的

天の父なる神は、その獨子を賜はりしことによつて、極度の愛を現したまへることを教ふ。

▼資料

(A) 直接資料……路加傳二章一—廿。

(B) 參考資料……新約物語、基督傳。

▼金言

それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり。(ヨハネ傳三章十六)

▼教話の準備

天の神さまは、この美しい花や木や、果物や穀物のある世界を私たちにお與へ下さいました、春や夏や秋や冬をおさだめ下さいました。太陽や月や星をも、私たちのためにお造り下さいました。なんとといふ大きなみめぐみでせう、それだけでさへ、とて

も非常なことなのに、神さまは、それだけで満足なさいませんで、もつと優れたものをお與へ下さいました、もうこれ以上のものはない、これは一ばん上のものだと仰しやつたものをお與へ下さいました。
それは何でせう、どんな寶物でせう、ダイヤモンドよりもつと立派なものでせうか。とても、そんな物はくらべものになりません、太陽を百個合せたよりも、世界を千よせたよりも、まだ、貴い御自分のたつたおひとりの王子イエスさまを、私たちにお與へ下さつたのです。

▼教話

神さまは、その貴い御獨子を此の世へお降しになるのに、どうなさいましたでせう。もし恐ろしく嚴めしい王さま姿で、澤山のお供をつれてお遣しになりましたら、貧乏人や病人や子供たちは、お側に近よることも出来なかつたでせう。そこで神さまは

ごくやさしい小さな赤ちゃんの姿にしておよこしになりました。赤ちゃんならば誰でも親しむことができるのですどんな人でも赤ちゃんをこはがりはいたしません。——しかし、その赤ちゃんは貧乏な人のお家においでになりましたから、誰でもたやすく近づくことができませんでした。

ところで、その赤ちゃんに、世話をして下さるお母さんとお父さんが必要でした。それには心の清い、愛のこもつた、親切な人々でなければなりませんでした。

それがために、神さまはマリヤといふ娘さんと、その「いひなづけ」のヨセフといふ人をおえらびになりました。「いひなづけ」といふのは結婚をする約束のできてゐる人のことです。この二人は、むかしユダヤでダビデ大王といはれた偉い王さまの子孫でしたから、まことに立派なちすぢの方々でしたけれども、そのころユダヤはロマの國に占領されてしまつたので、ヨセフもマリヤも貧乏なくらしをしてをりました。

さて、或る日のこと、天の使がマリヤに現はれて、

「マリヤさん、驚いちゃいけません、私は神さまのおつかはしになつたガブリエルと申す者でございます。あなたは、神さまから特別なみめぐみをお受けになりました、それはほどなく男の赤ちゃんをお産みになります、そしたら名前をイエスとおつけなさい、その赤ちゃんには普通の赤ちゃんではなく天の神さまの王子なのです。あなたはその貴いお方を産みまたお育て申す役目をおさづかりなすつたのです。……」

マリヤは、夢かとはかりよろこんで、

「どうぞ、神さまの思召しどほりになさつて下さいまし。」

と、お答へいたしました。そして、ヨセフもそのことを天の使に教へられましたからマリヤを大層だいに世話をいたしました。

この人たちは北の方のナザレといふところにゐましたが、生れたところはダビデ王の生れどころと同じベツレヘムでした。ところが、その時ロマの王さまは、ユダヤの人々の戸籍しらべをする御命令をおだしになりましたから、みんなは一先づ生れた土

地へ戻つてお役所に届けなければなりませんでした。

そこで、ヨセフはマリヤをつれて、はるくベツレヘムに向ひました。ナザレからそこまでは途中三晩もとまらなければならぬのでしたが、身重なマリヤをつれてのことですから、もつと餘計に泊まらなければならなかつたでせう。そしてやつこのとベツレヘムに着いてみると、もう四方からあつまつた人で、どこもかしこも一杯でした。宿屋はなほのこと、どこにも泊るところがありませんでした。

仕方なく二人は、とある人の家の片隅のむさぐるしい一室——といつても土間みないなところ——に泊めてもらひました。そこは驢馬や牛なども一しよでしたから、とても心地のよくないところでしたが、がまんをしなければなりませんでした。

ところが、そのむさぐるしい處に、貴いイエスさまがお生れなされたのです、なんといふ勿體ないこととせう。ナザレのお家をでかけてきた旅先のことであり、用意の持物とでもありませんから、驢馬に食物をやる箱のなかに藁をしいて、そこにイエス

さまをお寝かし申しました。

かうした、みずばらしい可憐さうな赤ちやんを、誰も天地をお造りなされた神さまの王子とは思ひませんでした、ただ知つてゐたのはヨセフだけでした。そこで神さまは、この事を羊飼ひたちにお知らせなさいました。

その晩のこと、おほせいの羊飼ひが、たくさんの羊を野原にやすませて、見張りをしてをりますと、とつせん、これまで見たことのない立派な天の使が、あらはれて、「これ、皆さん！おききなさい、非常にうれしいことがある、今日ダビデの町ベツレヘムに、みなさんのために、この世の救主(キリスト)がお生れなさいました。さあ、みんなで行つてお拜みなさい、そまつな布に包まつて、かひば槽にねかされておいでになります。」

と、いひました。羊飼ひたちはおどろいて、

「へえ……、キリストさまが、……。」

「ベツレヘムに……。」

「そんなに有難いお方が、なせ王さまの都のエルサレムでなくベツレヘムに……。」

「なあに、ダビデ大王さまだつて、ベツレヘムにお生れなされたもの。」

「なるほど、さうだ、ではベツレヘムに往つて見ませうか。」

と、相談してをりますと、にはかに何千何百とも、かぞへきれない天の使の群があらはれて、「いと高きところには、榮光、神にあれ、地には、平和、主のよろこび給ふ人にあれ。」

と、美しい聲をあはせて歌ひながら、天にまひあがつていきました。そこで羊飼ひは夢かとはかり喜んで、

「さあ、みんなで往つて拜みませう。」

と、いそ／＼町へと出かけました。ヨセフとマリヤの泊まつてゐるところを探しだし、かひば

桶のなかにすやく／＼睡つてゐらつしやるイエスさまを見ましたから、羊飼たちは、

「まあ、本當に……、まったく天の使の言つたとほりだと、言ひながら、うやく／＼しく頭を垂れて拜みました。」

貴い神さまの御獨子が、このやうにして、私たちに送られていらつしやいました、まことに有難いことではありませんか。

第三十九課 最大の賜物

「神の最善の賜物・二」

▼本課の目的

本課はクリスマス學課の精神を反復し、主イエス・キリストは世界萬民に對する最大の賜物なることを高調す。なほ此の日は一年ちう一ばん末の日曜日ゆゑ、年末の感

謝を併せ學ぶ。

▼資料

(A) 直接資料……約翰第一書四章七——十一。

(B) 參考資料……前學課、新約物語。

▼企言

神はその生みたまへる獨子を世に遣はし、彼によりて生命を得しめたまふ。

(ヨハネ一書四章九)

▼教話

あるところに、慾のふかい男がありました、そして一生けんめいお金をためました

お金のもうかることなら、どんなことでもいたしました、人のいやがることでも、恥かしいことでも、がまんしてお金をためました。

それが、あんまり憎らしいので、或る人が一つ懲しめてやらうと思ひ、

「どうです、大層もうかることができますが……。」

と言ひました、その男は

「どんなことですか。」

「さうですね、千圓もうかることです。」

「えッ、千圓?! それは大したもの、どんなことで……。」

「なあに、ほかぢやない、その代りあなたの命を貰ふのです。」

と言ひました。その男は、しばらく考へてゐましたが、

「私は、そんなに澤山ほしかありません。」

と言ひだしました。或る人は、千圓ぢや足りない、二千圓ほしいとも言ふのかと思

ひますと、あべこべに五百圓とは、をかしたと、ふしぎに思ひましたから、

「それは、何故ですか。」

と、きき返しますと、

「なかに、五百圓で澤山ですから、半ごろしにして下さい。」

と申しました。

なるほど、いくら千圓もらへても命をなくしては、なんにもなりません。どんな慾深でも、お金よりは命の方が大事ですから、五百圓でいいと言つたのです。

そのやうに、私たちが、どんなに立派な寶物を持つてゐても、命ほど大事なものはありません。たとひ千圓はおろか十萬、百萬といふたくさんのお金も、私たちの命を買ひもどすことができません。またにぎり拳ほどの大きなダイヤモンドでも世界に二つとない寶石でも、私たちの命の代りにはなりません。——また、たとひ世界ちうとたつた一つの命とくらべても、命の方がまだ大事です。

天の神さまは、私たちにこのやうな貴い命をお與へくださいましたのに、私たちが我が儘にも神さまの仰せにそむいて、その命をよごれた、きたない物にしてしまひましたから、神さまはイエスさまをこの世にお降しになつて、私たちの命をきれいにし神さまのみ國で、いつまでもつづく幸ひ——即ち限りなき命を戴くことができるやうにして下さいました。

このやうな貴い仕事は、イエスさまでなければ出来ない事ですから、イエスさまはわざ／＼天から此の世においでになつたのです。私たちの命が救はれるために、もし天の使が千人や二千人を身代りにしてよろしいものなら、それで間に合はせてせうまた、美しい天の星を一萬や二萬を代りに使ふことができたなら、それで事たりたのでせうけれども、私たちに限りなき命を與へることが、どうしてもイエスさまのお力でなければできないことでした。

さうですから、イエスさまは天にも地にもただ一人の貴い神さまの御獨子でいらつ

しやる御位をはなれて、私たち人間と同じ形になつて——しかもただの赤ちやんになつて——この世界にお降りなされたのです。なんと勿體ないこととせう。

何年か前のこと、英國の皇太子殿下がアイルランドといふところへお出かけになりダブリンといふ市へいらつしやいましたが、貧乏な人たちがどんな生活をしてゐるのか御覽あそばすために、わざ／＼貧民街へおいでになりました。そして穢いその家におはいりになつたり、むさ苦しい人たちにお言葉をかけたりして下さいましたから、みんなは、

「あゝ何と、もつたないことだらう、私共のやうな賤しい者をも、こんなにして下さつて……。」

と、非常によろこびました。それは左様でせう、大英國の王さまになるべき尊い方が賤しい人々のところへおいでになつて、やさしい言葉をおかけ下さるとは、一實に勿體ないことなのです。

けれどもイエスさまが、天のみ位をすててこの世にお降りになつたことは、それよりも、もつと／＼勿體ないことなのです。しかもイエスさまは、自分で貧乏なところに生れ、著る衣物とでもなく、寢床さへもないところにねかされて、此の世におぎやあおぎやあと産聲をおあげなさいました。そして貧乏な中にお育ちになつたのです。そればかりではありません、三十三のお年まで、苦しいなんぎな日をお送りになり、やがては極悪人と同じやうな十字架にかけられて苦しい最後をおとげなさいました。その有難いお骨折りは私たちに限りなき命を與へるためだつたのです。

さうですから、もしイエスさまが此の世にお生れ下さらなかつたなら、私たちの幸ひも望みもただ此の世かぎり、その先きは悲しみと苦しみと失望だけでした。また、この世の中でも義しい行爲もできず。楽しいくらしもできなかつたでせうと思ひます。私は今年も、幸ひに暮してまゐりました、一年のあひだ、春や夏秋や冬がありまして、そのあひだにはいろ／＼のことがあつたでせう。それがみんな、幸ひにすぎで、

楽しいクリスマスを迎へ、今また數日で嬉しいお正月を迎へようとしてゐます。
今日は今年の一ばんおしまひの日曜日、一年ちうのみ恵をかんしやし、悪るかつた
ことをお詫びして、神さまによりたのみ、イエスさまのみ教へを守りませう。

第四學期（一月、二月、三月）

第四十課 博士の禮拜

〔神の最善の賜物・三〕

▼本課の目的

神の賜物を赤誠以て拜受し、最善の献物をなすべきことを教ゆ。

▼資料

(A) 直接資料……馬太傳二章一―十二。

(B) 參考資料……新約物語、基督傳。

▼金言

寶の匣をあけて、黄金、乳香、沒藥など禮物をささげたり。(馬太傳二章十一)

▼教課の準備

私たちの知つたお家に赤ちやんが生れると、そのお家へお祝ひにゆきます、その時たいてい何か赤ちやんのためになる物を持つていきます。

また、お友だちのお誕生日に、私たちは何かその方の好きさうな物、よろこびさうな物を差上げてお祝ひいたします。

私たちは、神さまの御獨子イエスさまのお誕生日に、何を差上げてお祝ひいたしませう。神さまは、世界ぢうにくらべるものない、一ばん貴いお方を下さつたのですから、私たちも一ばん大事な物を差上げて、イエスさまを拜みませう。——今日は、そのお話をいたしませう。

▲教話

イエスさまのお生れなされることは、五百年も六百年も前からわかつてをりました。

それは、舊約聖書のなかに書いてありました、神さまは前以て、豫言者といふ神さまのみをしへを傳へる人々にお知らせになり、それを書きとめて弘く傳へさせなされたためでした。

そこで、東の國バビロンやベルシヤの國々でも心ある人々は、そのことを考へて、「はたして世界の救主がお生れなされるでせうか、その時どんな徴しるしがあるでせう、舊約聖書のなかに、一つの星が出るとも書いてある、それはただの星でなく、とくべつの星であるにさうぬない、それでは星をよくしらべませう。」

と、學者たちは天の星を眺めました、星をしらべる學問を天文学と申します。

もちろん學者たちのうちには、「そんなことはエダヤの國の迷信だ、でたらめだ」といふ人もありました。そのうちに何十年、何百年と月日がたちました。

わけでも、バビロンは天文学の進んだ國でしたが、その國の博士たちのうちに、心から世界の救主のお生れになるのを待つてゐる人々がありました。

ところが、今から一千九百三十年ばかり前のこと、西の空へと大きなふしぎな星があらはれました。博士たちは、こをどりして、

「これこそ、かね／＼待つてゐた世界の救主がどこかの國にお生れになつた徴にちがひない。」

と、めい／＼立派なおみやげを用意し、駱駝に乗つて、その星をめあてに星のでてゐる西へ西へと旅だちました。

ところが、ふしぎな星は先きになつて、ずん／＼進みましたから、博士たちは、その星のうごく方へと駱駝をすゝませました。そして、やつてまゐりましたところは、アジアの西のはて、地中海にくつついたユダヤの國でした。

そこで博士たちは、ともかく王さまの都へいつて訊くのが早や道と、そのまゝエルサレムを指していきました。すると都の人々は、この珍らしい旅人を見て、

「どなたでせう？」

「なにをする人たちでせう？」

「どこへ来たのでせう？」

と、うはさをいたしました。博士たちは、はじめてやつて来たこととて、さつぱり様子がわかりません

「もし、一寸伺ひますが、こんど世界の救主としてお生れなされたユダヤの王さまはどちらにおいでになりますか。」

「えッ、こんどお生れになつた王さまですつて？、へえ、そんなことは知りません。」

「でも、私たちは、その徴の星にみちびかれてまゐつたのです。そして、この國でとまりましたもの……、きつと、この國にさうございませぬ。」

「なんですつて、星？ そんな星なんて、こつちには見えはしませんでしたよ。」

「はてな、そんな筈はないのだが……。」

あまりに、博士たちがまじめなので、たちまち、そのことがエルサレムぢうに弘ま

つて、ヘロデ王の耳にはいりました。王さまは、自分のほかに新しい王さまが生れたときいて、ひじやうに、びつくりいたしました。しかも、ずつと偉い王さまだとすれば、自分のくらのが危くなるかもわかりません。

そこでヘロデ王は、さつそく立派なお役人や學者たちをお召しになり、はたしてそんなことがあるかどうかをおたづねになりました。學者たちは、

「はい、王さま！ 聖書のなかにキリスト（世界の救主）のお生れなるところは、ベツレヘムだと書いてございます。」

「なに、ベツレヘムと申すな。」

「さやうでございます。むかし預言者が、神さまの仰せをうけて、そのやうに書きのこしまして御座います。」

「あゝ、それではいよく確かであるな。」

ヘロデ王は、ますます心配になりました。そこで、博士たちをおよびになり、星が

いつごろ出たか、委しくいろいろのことをおたづねになり、

「では、たしかにベツレヘムにさうゐない、往つてごらん、そして王さまを拜んだなら、歸りによつてお知らせなさい、私もせひ往つて拜みますから……。」

と言ひました、けれどもそれは口先だけで、じつは博士たちから委しくきいて、イエスさまを見つけて殺さうと思つたのです。

もちろん、博士たちは王さまの悪るだくみを知りませんから、そのお約束をしてベツレヘムに向ひました。ふしぎな星は、またも先きになり、ベツレヘムへと進みましたから、どんなに勇みたつたかわかりません。

まもなく、パツレヘムにつきますと、星はびつたり止まりました。博士たちは星の下にあるお家をしらすと、まさしくそこに可愛らしい赤ちやんが、お母さまのマリアに抱かれてをりました。

博士たちは、よろこんで其の前にひざまづき、はるく持つてきたおみやげを、イ

エヌさまに差上げました。そのみやげといふのは何だつたでせう。

一人の博士は、黄金わうごんを差上げました。黄金といふのは金のことです、金貨や金でこしらへた寶物やお道具などのことで、王さまのやうな貴い人の使ふものです。

次ぎの博士は、乳香といふものを差上げました。それは非常に匂ひの佳いい膏こうで、價の高いもの、王さまのやうな方々の使ふものでした。

三ばんの博士は、没薬ぼつやくといふものを差上げました、それも價の高い油で、大事な儀式などに使ふものでした。

これらのおみやげは、まごころの籠かごつた。そして非常に佳いものでした、つまり世界の救主である貴い王さまに差上げる考で用意したのです。——私たちも主イエスマを、まごころから拜みませう、そして、佳い物を差上げるために熱心に働きませう。

第四十一課 ヨセフの孝行

〔神の喜び給ふ行爲・五〕

▼本課の目的

親孝行は神の喜びたまふ行爲にして、子たる者の最も尊き行爲なることを教ゆるものなり。

▼資料

(A) 直接資料……創世記四十五章十六―廿八。四十六章一―七、四十七章一―十二

(B) 参考資料……ヨセフ物語、甞より。

▼金言

なんちの父母を敬へ。(山埃及肥二十章十二)

▲教 話

皆さんは、ヨセフのお話をよろこんでおききになりました、さだめし其の先きをもおききになりたいでせうと思ひます。

十一人の兄弟と名乗りあつたヨセフの歡びは、とても筆や言葉につくせないものでした。けれども、いつまでも引きとめておくことも出来ませんから、ヨセフは斯ういひました。

「この饑饉はまだ／＼續きます、さうです七年間の饑饉です、どうしてといふに、實は私が無い罪をさせられて牢屋にいれられてゐた時、王さまがふしぎな夢をごらんになりました。それは七匹の肥えた牛を、七匹の瘦せひつからびた牛がたべたのです、王さまがその夢のわけが何か、國ぢうの學者におたづねになつてもわかりません、その時牢屋で私の世話になつたお役人が、私のことを王さまに申上げて、ヨセフならば

其の夢がわかるでせうと申上げました。——ねえ、私小さい時よくおもしろい夢を見たでせう——。そこで私が王さまのところへつれてゆかれて、その夢のわけを申上げました、もちろん神さまのみ力によつて、そのわけがわかつたからです。

で、つまり七匹の肥えた牛は、七年の豊作で七匹の瘦牛といふのはそのあとにつづく七年の饑饉です。さうですから、饑饉はこれから先きも長いのです。そこで幾度麥を買ひにきても追つきませんから、いつそのこと、此地へ引越しておいでになつてはどうでせう。私は王さまに願ひして、あなた方を幸にして上げませう。」

「なるほど、さうですか、まだなか／＼續くのですか。」

「ですから、これから急いでお家へ歸り、お父さまに御相談なすつて下さい、そして是非おいで下さるやうにつて。お父さんが私のことをおききになつたら、どんなに安心して下さるでせう。これ、この着物はお父さまが着ておいでになるやうに、また馬車を一臺用意しましたから、それにお父さまが乗つておいでなさるやうに……」

そこで、十一人は大よろこび、非常に勇んでお家へ往きました。

カナンの方では、お父さんのヤコブが待ちかねてをりました、ベニヤミンが無事で歸れることか、人質にのこされたのも無事か、みんなの歸るは今日か明日かと待ちました。そのところへ十一人が。

「お父さま、只今歸りました。」

と、いつて戻りましたから、

「お、歸つたかへ、十一人は皆無事か、ベニヤミンはどうしたえ。」

「お父さま、私ベニヤミンです。」

「おう、無事だつたか、何事もなかつたか。」

と、曇つた眼をおしつけて安心の色を顔にみながらせました。十一人は、

「時に、お父さま。實にふしぎなことがありましたよ、それで少し手間どつたので、

ひじやうに面白いことが。」

「なんだねえ。」

「でも、びつくりしちやいけないよ。」

「なにを言ふねえ、そんなに勿體をつけて。」

「でも、非常なことなんです。」

「まあ、いいから言つてごらん。」

「それはねえ、私たちはヨセフに會つて來たんです。」

「へん、なにを言ふのだ、出鱈目を……。二十年前に死んだものが、どうして會へる

もんか、ヨセフに似た者といふんだらう。」

「いいえ、さうぢやありません、エジプトの總理大臣がヨセフだつたんです。」

「なにを言ふんだ、狼に喰はれた者が總理大臣もあるもんぢやない。」

ヨセフを死んだものと思ひつめてゐるヤコブは、どうしても、みんなの言ふことを

ほんとに致しません。

「お父さま、本當ですよ。」

「いいえ、おどかすなよ。」

そこで、十人は改まつて申しますのに、

「實は、お父さま、私たちは二十年のあひだお父さまをだましてをりました。あの時ヨセフが狼にころされたのでなく、エジプトへゆく隊商に賣つてやり、それをかくすために、ヨセフの着物に羊の血をぬつたのです、なんとも相済みません、おゆるし下さい。」

と、なみだながらにお詫びをいたしますと。

「では、あの時ヨセフが死ななかつたのか……。」

「はい、左様でございます。」

「ああ、うれしい、それではヨセフが生きてゐるのか、あゝ嬉しい、して、どこに、何をして？」

「ですから、エジプトの總理大臣をしてと申し上げたのです。」

「なに、總理大臣をして？それや、なんだか信せられない……。」

「でも、本當ですよ。」

「ふむ……、これ私は夢を見てゐるのぢやあるまいな。」

「いいえ、夢ぢやありません本當のこと。それではこれをごらん下さい、これがお父さまへといつてよこした着物です。」

ヤコブは手にさはつて見ると、まさしく絹の着物、目をおしつけて見ると、王さまや貴族の着る着物。

「ふむ、ヨセフがこれを私に……。」

「それからまだありますよ、それは外にありますから出てごらん下さい。」
といつて、立派な馬車にさはらせて見せました。

「ヨセフは、このやうなものを私によこしたか、あゝ……。」

と、はや涙！どんなにうれしかつたかわかりません。

「お父さま、そこで御相談をいたしますが、この饑饉はまだ何年もつづくのださうです、一年や二年ぢやないんです。そこでヨセフの申しますのに、お父さまにはお目にかかりたいし、それから、みんなも幸ひに暮らせるのですから、饑饉がすむまでエジプトへ引越しておいでなさいましといひますが、どうでせう。私たちもそれが好いと思ひます。幾度小麦を買ひにいつでも追つつきませんもの……。」

「さうか、なるほどそれが好い……。私も生きてゐるうちに、せひヨセフに會ひたいし……。」

そこで、ヤコブは十一人の息子やその嫁や子供たち、みんなで七十人をつれてエジプトの國へゆきました。ヨセフは、王さまに願ひしてゴセンといふ土地を戴いて、みんなの來るのを待ちまして、そして二十年ぶりでお父さんに會つた時のよろこびはとても非常なものでした。

「お父さま、お久しうございました。」

「おお、ヨセフ、私は此の世でお前に會へようとは思はなかつた、なんといふ神さまのみめぐみだらう。」

と言つて、お父さんは嬉し泣きに泣きました。

それから、ヨセフはお父さんが百四十七で死ぬまで、まごころから手厚い孝行をいたしました。そのあひだが十七年でありました、その十七年はお父さんにとつて一ばん楽しい時だつたでせうと思ひます。

お父さんを大事にしたヨセフは、兄弟たちにも親切で、みんなが安心して暮らせるやうに世話をして上げましたが、百十歳になつて此の世を去りました。なんと立派な美しい心の人ではありませんか。